仙台市文化財調查報告書第7集

仙台市富沢

裏町古墳発掘調査報告書

昭和49年3月

仙台市教育委員会

仙台市文化財調查報告書第7集

仙台市富沢

裏町古墳発掘調查報告書

昭和49年3月

仙台市教育委員会

仙台市南部の長町から西多賀周辺にかけては、戦前より古墳が数多くある地域として知られていましたが、戦後の宅地化の進む中で、それらの多くは次々と調査もされず破壊されてしまいました。その中には、かつて刳抜石棺を出土した二塚古墳も含まれていました。

仙台市富沢の裏町古墳もそうした中で、人知れず破壊されかけた古墳でありましたが、たまたま、昭和47年11月、当教育委員会が定期的に実施している文化財 実態確認調査において、その所在が確認されました。

家屋の新築工事着工寸前という切迫した事態の中で、とり急ぎ昭和47年12月に 古墳の第一次調査を実施した結果、本古墳が仙台市内には稀少の前方後円墳であ る可能性が強くなりました。そこで、最終的な古墳の保存策を検討する為、仙台 市教育委員会では、国庫、県費補助による第二次調査を実施することとし、仙台 市文化財保護委員伊東信雄氏に調査担当を依頼しました。

調査は、京都平安博物館、宮城県多賀城跡調査研究所、宮城県教育庁文化財保護課、東北大学など各方面からの協力をえて、昭和48年6月30日から8月3日までにわたって実施されました。その結果、本古墳は、主軸の長さ40m以上の前方後円墳であり、葺石、埴輪をめぐらした堂々たる古墳であり、埋葬部には、県内では稀少な珠文鏡などが副葬されていることなど、多くの成果をおさめました。

しかし、度々の盗掘の厄などにあって古墳の原形が相当損われていること、地 主方における家屋新築の強い要請などによって、まことに遺憾ながら本古墳を後 世に保存することを断念せざるをえない情勢でありました。

私達の非力を深くおわびする一方、この報告書が多くの方々によって有効に活用され、学術文化の発展に寄与することを願わずにはいられません。

末尾ながら、炎暑の中調査に従事され、また御協力頂いた方々に厚く御礼申し 上げます。

昭和49年3月

仙台市教育委員会 教育長 佐藤 敬

- 1. 本報告は、昭和48年6月30日から8月3日にかけて実施された仙台市富沢裏町古墳 の緊急発堀調査の正式報告書である。
- 2. 本報告の内容は、緊急発掘による学術的記録と若干の考察を含む。
- 3. 本文の執筆担当は、次のとおりである。全体の総括は、伊東信雄が行った。

伊東信雄····· I、Ⅵ

伊藤玄三····· V <(4)、(5)d、e、VI-(1)、(2)

岩渕康治······ II、III、Ⅳ、Ⅴ—(1)、(2)、(3)、(5)a、b、c、f、Ⅵ—(3)

4. 本報告に掲載した図面の作成などには、伊東、伊藤の指示のもとに、岩渕が統一的 あたったが、次の各機関、各位より、多大の御協力を頂いた。

財団法人 宮城県文化財保護協会

藤沼邦彦(宮城県教育庁文化財保護課技師)

木村浩二、鈴木実夫、佐山京子、山田稔(以上、東北学院大学考古学研究部)

- 5. 本文中の註釈は、本文末尾にまとめた。
- 6. 裏町古墳に関しては、以前二度にわたり、概報、説明会資料を発行しているが、本報告の記載をもって、優先するものと理解して頂きたい。
- 7. 本書の編集には、岩渕があたった。
- 8. 本調査に関する庶務、渉外などは、仙台市教育委員会社会教育課が担当した。

調査団事務局:仙台市教育委員会社会教育課(課長)東海林恒英、(前課長)黒沢充、(文 化財係長)瀬戸捷夫、(主事)鈴木高文、朝倉秀之、八木伸善、(嘱託)大泉重治、 岩渕康治

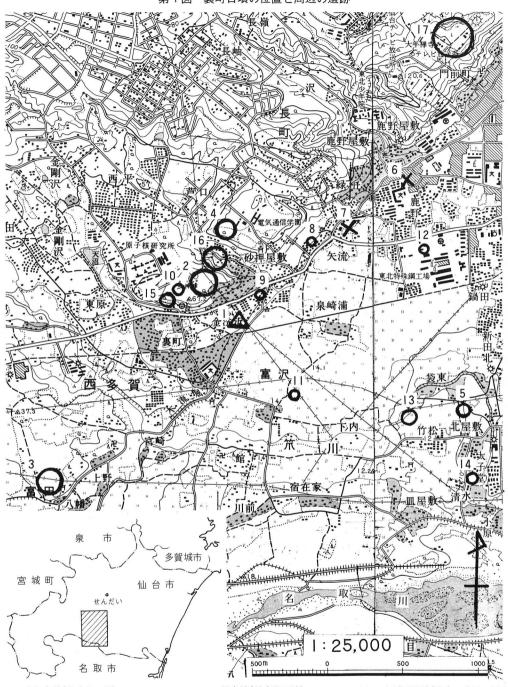
本 文 目 次

序	• • • •	
例	Ē	
Ι	緑	言1
II	古	- 墳の位置と立地環境
III	誹	査に至る経過
IV	訓	查経過
	a	. 測量調査時の所見
	b	. 第一次調査の経過
	c	. 第二次調査の経過
٧	誹	查内容
(1	L)	古墳の形態、規模11
(2	2)	古墳の外部施設12
	a	. 埴輪列12
	b	. 葺石配置状況
	c	. 周 湟
(3	3)	墳丘築成状況
(4	!)	内部主体
	a	. 内部主体の形態、構造
	b	. 内部主体における遺物の出土状況19
(5	5)	出土遺物21
	a	. 埴 輪 ··································
		① 形態的分類所見21
		② 成形、調整技法および焼成などに関する所見23
	b	. 須恵器25
	c	. 土師器26
	d	. 珠文鏡27
	е	. 鉄製品27
	f	. その他の遺物28
VI	老	察29
(1	L)	古墳の築造年代について29
(2	2)	古墳の被葬者について30

(3)	出土品について		• • • • • • • • • • • • • • • • • • • •				32			
VII 仙台市内の古墳中における裏町古墳の位置・・・・・・・35										
				_						
		挿	凶	目	次					
第1図	裏町古墳の位置と周辺	の遺跡	•••••	••••••	••••••••••	······目次』	裏			
第2図	名取川流域地形略図…									
第3図	三神峯遺跡遠景									
第4図	三神峯遺跡出土旧石器	• • • • • • • • • • • • • • • • • • • •		••••••	•••••	•••••	4			
第5図	三神峯周辺古墳分布略	I	• • • • • • • • • • • • • • • • • • • •	•••••	•••••		6			
第6図	裏町古墳埴輪分布状況	• • • • • • • • • • • • • • • • • • • •			• • • • • • • • • • • • • • • • • • • •	1	. 3			
第7図	葺石積成断面図		•••••	• • • • • • • • • • • • • • • • • • • •		1	4			
第8図	周湟土層断面図			•••••	••••••	1	.6			
第9図	朝顔形埴輪模式図		••••••	• • • • • • • • • • • • • • • • • • • •	••••••	2	22			
第10図	富沢窯跡		•••••	• • • • • • • • • • • • • • • • • • • •	•••••	3	3			
第11図	遠見塚古墳	• • • • • • • • • • • • • • • • • • • •	•••••	• • • • • • • • • • • • • • • • • • • •	•••••	3	55			
第12図	法領塚古墳横穴式石室·	• • • • • • • • • • • • • • • • • • • •		• • • • • • • • • • • • • • • • • • • •	•••••	3	6			
第13図	兜塚古墳	•••••	•••••			3	6			
第14図	一塚古墳出土家形石棺·	• • • • • • • • • • • • • • • • • • • •	•••••		•••••	3	6			
第15図	二塚古墳出土刳抜石棺·		•••••	••••••	•••••	3	7			
	1	义	版	目	次					
表 1	仙台市内の古墳、横穴	一覧								
図版 1	仙台市内古墳、横穴分	布図								
図版 2	裏町古墳調査前実測図									
図版 3	裏町古墳調査実測図									
図版 4	古墳断面土層図									
А	後円部土層断面図									
В	前方部土層断面図									
図版 5	内部主体実測図									
図版 6	筒形円筒埴輪実測図									
図版 7	埴輪実測図									
図版 8	埴輪実測拓影図									

- A 各部実測図
- B 刷毛目拓影
- 図版 9 土器実測図
- 図版10 遺物実測図
 - (1. 珠文境、2.3. 鉄器、4. 片口土器)
- 図版11 西多賀地方航空写真
- 図版12 古墳遠景
- 図版13 古墳調査前状況
- 図版14 表土排除の状況
- 図版15 古墳断面
- 図版16 裏町古墳葺石検出状況
- 図版17 埴輪出土状況
- 図版18 内部主体
- 図版19 周湟
- 図版20 調査完了航空写真
- 図版21 埴輪
- 図版22 須恵器
- 図版23 珠文鏡、鉄器、片口土器

第 | 図 裏町古墳の位置と周辺の遺跡



- 1. 裏町古墳(前方後円墳)
- 2. 三神峯遺跡(旧石器・縄文)
- 3. 上野遺跡(縄文・土師)
- 4. 芦ノ口遺跡(縄文・土師)
- 5. 袋遺跡(縄文・土師・須恵)
- 6. 一塚古墳(円墳)

- 7. 二塚古墳(前方後円墳)
- 8. 砂押古墳(円墳)
- 9. 金洗沢古墳(円墳)
- 10. 三神峯古墳(円墳)
- 11. 教塚古墳(?)
- 12. 金岡八幡古墳(円墳?)
- 13. 六反田遺跡(弥生・土師・須恵)
- 14. 清水遺跡(埴輪)
- 15. 富沢窯跡(埴輪・瓦・鉱滓)
- 16. 土手内横穴群(横穴古墳)
- 17. 茂ケ崎城跡(中世)

⊺ 緒 言

裏町古墳は長い間、忘れられた古墳であった。それは、すでに破壊されかかった小円墳と思われていたからであった。わたし(伊東)がこの古墳を最初に見たのは昭和24年であったが、その時すでに封土のまぐらいは削られていた。『仙台市史』に「仙台市内の古代遺跡」を執筆する際、西多賀附近にかつて小古墳のあったことを耳にし、附近を捜索した結果、畑の中の杉林の中で見いだしたものであった。頂上に石祠があって、その附近に埴輪円筒の破片がすてられていた。これで古墳であることが確認されたのである。当時は墳丘上には杉が密生していたため見通しがきかず、前方部を発見することができず、目測で径約20m、高さ約5mの円墳として報告した。①

その後23年の間に附近の状況は一変した。畑は宅地となり、家が建てこんで来て古墳はいつの間にか人家の蔭にかくれてしまって人目につかなくなった。裏町古墳が忘れ去られた理由はここにある。たまたま昭和47年11月仙台市教育委員会の岩渕嘱託が市内の文化財確認調査のため当地をおとずれた際には、かっては墳丘上をおおっていた杉はみな伐りはらわれ、墳丘は全貌をあらわしていた。

その際の観察によると墳丘は西方に低く伸びて前方後円墳のように見られた。そこで市教育委員会でははたして前方後円墳であるかを確かめるため、昭和47年12月20日から27日まで主として前方部の調査を行なった。これが第1次発掘調査である。その結果長さ約40mの西向きの前方後円墳であることがほぼ見当づけられた。

40mの前方後円墳とすると、前方後円墳としては市内で国指定の遠見塚古墳に次ぐ、第2位の古墳であり、古墳全体としても径50mの兜塚円墳に次ぐ第3位の大きさでこの地方としては貴重な文化財である。ところが土地所有者はこの地に自宅の増改築を計画中で、削平寸前であったので、その保護問題の解決が焦眉の急となった。保存するにしても、破壊を認めるにしても精密な調査を行なって古墳の実態を把握することが必要であった。そこで仙台市教育委員会では文化庁、宮城県教育委員会と協議した結果、本格的な発掘調査を行なって保存問題に結論を出すことになり、国費および県費の補助を得て昭和48年6月30日から35日間の第2次発掘調査を行なった。

調査の結果、墳丘は前方部、後円部ともにかなり削られており、墳丘上の埴輪、葺石も取去られたもの多く、主体部たる積石石室は古い盗掘によって無残に破壊され、取のこされた副葬品もわずかであることが判明したので、大きな古墳ではあるが、保存措置を講ずるにはあまりにもこわれすぎていると判定、民有地で地主が自家用に使用するという事情をも考慮して、調査後の削平は止むを得ないとの結論を出すに至った。現在は墳丘は削平され、すでに建物が建

てられている。裏町古墳のかっての姿は本書によって知ることができるだけとなった。破壊直前に本古墳が再発見されて、一応の調査を行ない調査記録を残すことができたのをせめてもの 慰めとしなければならない。

発掘調査の実施に当っては文化庁、宮城県教育委員会の配慮を得ることが多かった。また平安博物館長角田文衛博士が同館も研究調査に多忙の折であったにも拘わらず、当方の要請を快く容れられて、同館伊藤玄三助教授を派遣して調査を援助せられた厚意はわすれることができない。また地主庄子春二氏が文化財調査の意義をよく理解されて、調査の結論の出るまで宅地造成を延期、調査に協力されたことに感謝する。

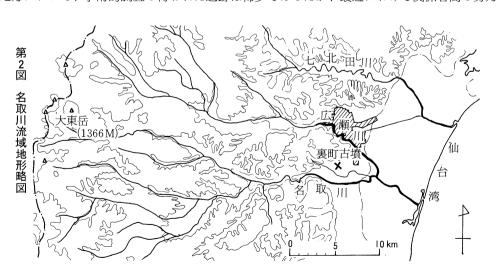
異常ともいうべき昨夏の炎暑の下で、発掘に、実測に挺身された調査担当の諸君、蔭の力となって調査事業を円滑に推進せしめられた事務担当の諸君の努力に対しても深い感謝の意を表する。

II **古墳の位置と立地環境**(第1図、第2図)

裏町古墳は、仙台市富沢字裏町14の1、庄子春二氏所有山林内に所在していた。ちょうど仙台駅の西南方約4.1キロに位置する。古墳の付近には、仙台市内最古の縄文時代集落跡であり、その秀れた眺望と桜並木によって、広く市民になじまれている三神峯公園があり、遺跡は、その三神峯の南麓、国道 286 号線を越えたところに位置する。遺跡東南方には、名取川の形成した、標高10m 内外の肥沃な西多賀耕土を、はるかに望見することができる。古墳付近も、10数年ほど前までは、田園地帯としての環境の中にあったのだが、その後の急速な宅地化の進展とともに、景観もだいぶ変貌し、ために、古墳は、宅地化の中にポツンと残された離れ小島のような状況に置かれていたのである。しかも、古墳東南方に広がる田園地帯も、市街化区域内にあって、区画整理事業の施行により、近い将来、全面的に宅地化される予定にある。

古墳の位置を地理的、地形的に見てみると、仙台市南部を流れる名取川は、宮城一山形県境付近にある奥羽山系大東岳付近に水源を発して東流する。そして、仙台市茂庭付近で中流域に入って川幅を広げる。さらに、仙台市山田、名取市熊野堂に至って谷が開け、数段に及ぶ発達した河岸段丘を形成している。この段丘の形成は、西多賀丘陵を背後に控えた北岸地区において顕著である。古墳は、このうち、中位の河岸段丘上に位置する。墳頂の標高は約31mである。古墳の立地基盤は堅固な砂礫層であり、その上を、黄褐色ローム層、黒色腐蝕土層が覆い、古墳は、黒色土層の上に築造せられている。

次に、裏町古墳をとりまく、西多賀地方の歴史的環境について概観してみよう。従来、西多 賀地方において、学術的調査の行われた遺跡は稀少であったが、最近における関係者間の努力



により、次第に、その歴史的環境の重要性が明らかになりつつある。とくに、従来、北岸丘陵、段丘地帯に集中していると見られた遺跡分布が、沖積平地にも広がっていることが判明したことは重要である。^②

先ず、縄文時代にあっては、主として 丘陵部における分布が、以前からよく知 られていた。三神峯遺跡(第3図)上野 遺跡、根岸前遺跡などが主なものだが、 これらは、市内全域を見ても、代表的な 縄文遺跡である。このうち、三神峯遺跡 は、古くから識者によって注目され、ま た数多くの遺物を出土してきた。その所 属年代は、今の所、縄文前期初頭から、 中期前半に及ぶと考えられている。とく に、昭和42年には、宮城教育大の調査に より、遺跡範囲の調査がなされ、③また、 昭和48年には、仙台市教委の調査によっ て、仙台市内で最初の縄文時代住居跡の



第3図 三神峯遺跡遠景 (西多賀耕土より)



第4図 三神峯遺跡出土旧石器

検出がなされている。 $^{\textcircled{4}}$ さらに、昭和43年には、旧石器と見られる遺物の出土もあり(第4図) $^{\textcircled{5}}$ 仙台の歴史の起源を究明する上で、最も重要な位置を占める遺跡として注目される。

仙台市内における弥生時代遺跡の分布は、これまでの所、南小泉遺跡、西台畑遺跡などをはじめ沖積平地帯に集中的に見られる。 西多賀地方において、従来、弥生時代遺跡の存在はほとんど知られていなかったが、最近荒川流域の自然堤防上から、弥生式土器が発見されはじめている。この笊川は、三神峯西方、金剛沢付近に源を発し、西多賀耕土を横断して名取川に合流する小河川だが、平地帯を流れる河川にありがちな蛇行現象が顕著で、両岸の自然堤防も、よく発達している。

西多賀地方において、従来確認されてきた古墳の数は、仙台市内全域における確認総量の中でも多数を占める。その中でも、特に、埴輪を有する古墳が多いことが指摘できる。(遺憾ながら、これらの古墳の中には、調査もされずに壊滅してしまったものが多い。)また、これら西多賀地方の高塚古墳の分布に関しても興味ある現象が指摘できる。すなわち、東から、兜塚、一塚、二塚、砂押、金洗沢、裏町といった各古墳は、東西にのびる西多賀丘陵の南麓、標高20

~30mの緩斜面上に一線に連なって分布しているのである。一方、最近、沖積平地においても、 埴輪破片の散布地が発見されはじめている。^⑥ 地形的に見て窯跡である可能性よりは、昭和47 年度新幹線予定路線内における調査中発見された安久東古墳^⑦などの如く、耕作などによって 墳丘を削平された古墳が存在する可能性が強いのではあるまいか。横穴古墳は三神峯北斜面に 相当数群在する。いずれにしろ、西多賀地方における大小の古墳の集中は、古墳時代において、 西多賀耕土を基盤として高度に発展した農業共同体の確立を物語るものといえよう。

歴史時代における西多賀地方の姿は、いまだ定かでない。一時、「三神峯」が多賀城以前の 陸奥国府、すなわち「名取鎮所」説が出されたこともあるが[®]、明瞭な裏づけとなるものはほ とんどない。しかし、付近が策街道のルートにあたっていたことなどと考えあわせ、前代から 引続き、生産性の高い集落を形成していたことが考えられる。今、西多賀地方は、仙台市西南 部にあって、一面において、のどかな田園風景を保っているが、やがて、急速な宅地化の大波 に呑みこまれようとしている。一塚、二塚古墳が消え去って、裏町古墳もそうなってしまった ように、やがては、あの肥沃な西多賀耕土も消え去ろうとしている。

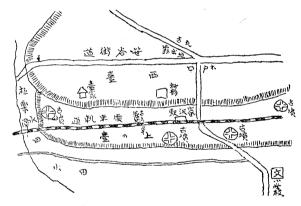
Ⅲ 調査に至る経過

西多賀地方に古墳が数多く存在しているということは以前から識者によって注目されていた。 しかし、押し寄せる宅地化の波の中に、いつしか、それらの古墳の実態や正確な位置すら忘れ 去られたものが多く、昭和40年代に入って刊行された全国遺跡地図や遺跡地名表などからも、 ごく一部の古墳を除いて、ほとんど登録もれとなり、その間に未確認のまま壊滅してしまった 古墳も数多くあると思われる。裏町古墳も、そうした中の一つであった。

裏町古墳について記している文献は、伊東信雄「仙台市内の古代遺跡」(『仙台市史第3巻』 昭25)がほとんど唯一のものである。その他では、浜田廉「名取鎮所址」(『宮城県史蹟名勝 天然紀念物調査報告第5輯』昭4)に西多賀地方の古墳分布略図が掲載されており、図中、東端の古墳が、位置的に裏町古墳に該当するようである(第5図)。 この図によって、裏町古墳 以外にも、近辺に多数古墳が存在していたことが考えられるが、現在は見当らない。

仙台市教育委員会では、開発と 文化財保護の調整が問題化してい る折りから、市内に所在するすべ ての文化財の実態の把握・点検、 位置・範囲を記録する作業を昭和 47年度より開始したが、その初年 度において、裏町古墳の所在が確 認された。

裏町古墳の確認時の状況は、南 側が宅地として利用され、墳丘の



第5図 三神峯周辺古墳分布略図 (浜田廉氏作成図、昭4)

南半4分の1ほどが削除され、かっては、うっそうと繁茂していたと見られる樹木も、墳頂部 のツゲの古木を除いては皆伐されており、地主庄子春二氏方において、家屋新築計画が進行中 であり、まさに、古墳削平工事着工寸前の状況であった。

仙台市教育委員会では、とりあえず、庄子氏に対し、当面の古墳削平を延期するよう要請する一方、昭和47年12月、宮城県教育庁文化財保護室、仙台市文化財保護委員伊東信雄らと古墳の保護問題について協議した。その結果、本古墳の確認時の所見として、円墳か前方後円墳かといった基本的形態の確証が得られなかったため、当面、古墳の基本的性格を把握することが第一であることを確認し、ただちに、墳丘測量が宮城県文化財保護協会により実施され、第一次発堀調査が、仙台市教育委員会によって実施された。その結果、本古墳が主軸長40m余の前

方後円墳として、市内でも有数の古墳である可能性が打ち出された。[®] こうした成果をふまえて、昭和48年1月19日に、再度の保存問題打合せ会が、宮城県教育庁文化財保護室、仙台市文化財保護委員伊東信雄、仙台市教育委員会社会教育課の参加で開かれた。その結果、古墳の保存策としては、指定買上策しかないが、そのためには、内部主体の究明を含めた詳細な学術的調査成果が必要であることを確認した。

この結論に従って、仙台市教育委員会では、昭和48年度国庫、県費補助事業として、裏町古 墳の緊急発堀調査を実施することとし、地主の庄子春二氏には、調査完了まで工事着手を延期 するよう要請し、了承を得た。

墳丘測量、第一次、第二次各調査の期間、予算、組織などは下記の通りである。(所属は調査時のもの)

▽墳丘測量調査

予算:120,000円

期間:昭和47年12月15日~20日

調查主体:宮城県文化財保護協会

委託測量:株式会社東北地形社

▽第一次 発掘調査

予算:50,000円

期間:昭和47年12月20日~27日

調査主体:仙台市教育委員会

調査担当者:伊東信雄(仙台市文化財保護委員)

調査指導:志間泰治(宮城県教育庁文化財保護室調査係長)氏家和典(同、技術主査)

調査員:岩渕康治(仙台市教育委員会社会教育課)

調査参加者:八巻正文(東北大学大学院文学研究科) 川村正、大槻良子(東北学院大学考

古学研究部) 庄子二郎(農業)

▽第二次発掘調査

予算:1,690,000円(国庫補助845,000円、県費補助422,000円、市費423,000円)

期間:昭和48年6月30日~8月3日

調査主体:仙台市教育委員会

調查担当者:伊東信雄(仙台市文化財保護委員)

調查指導:志間泰治(宮城県教育庁文化財保護課調査第一係長), 氏家和典(同、調査第二係長), 岡田茂弘(宮城県多賀城跡調査研究所長)

調查員:伊藤玄三(京都平安博物館助教授), 桑原滋郎、進藤秋輝、西脇俊郎、高野芳宏 (以上、宮城県多賀城跡調査研究所技師), 須藤隆(東北大学文学部助手), 小井川和夫 (宮城県教育庁文化財保護課技師), 岩渕康治(仙台市教育委員会社会教育課嘱託),

調査参加者: 古泉弘(宮城県多賀城跡調査研究所調査補助員), 清水芳裕、渡辺伸行、飯島 義雄(以上、東北大学文学部考古学科), 志賀豊徳、鈴木実夫、木村浩二、山田稔、佐々 木由利、富沢美也子、宍戸宏和、千葉寿郎、小山玲子、宍戸義彦、志間玲子、紫桃尚子、 関仁子(以上、東北学院大学考古学研究部), 渋谷正三、小野寺祥一郎、斎藤智恵子、真 砂まゆみ(以上、宮城教育大学考古学研究会)

地元協力:庄子二郎、及川源四郎、高坂修吾、小池政次郎、菅原美登利、支倉照幸、沼田治行、庄子勝治、山田しよう、半沢正、

調查協力: 宮城県教育庁文化財保護課、 宮城県多賀城跡調査研究所、 東北大学文学部考 古学研究室、 菅野寅夫(東北電力)

IV 調査経過

a 測量調査時の所見

墳丘は、南側および東側の一部が、墳丘基底部に達するまで垂直に削除され、断面には、積土の黒色土と黄色土の互層が顕著に認められた。墳丘の形態は、平面的にはほぼ円形であったが、墳頂部が平坦で、いわゆる截頭形円墳かと思われた。しかし、墳丘の西側には、周辺部との比高1m程度の微隆起状の張り出しが認められ、あるいは、前方後円墳の前方部の可能性も秘めていた。断面観察の結果、この張り出し部分にも、ごく薄くではあったが、積土層が認められた。ただ、この張り出し部と墳丘部分との間に幅1mくらいの溝状の浅いおちこみがあっって、墳丘と張り出し部分間の積土層の連続を遮断していた点が疑問点として残された。墳頂部分には、3ヶ所ほどの盗掘拡があり、その盗掘拡を中心として、円礫、角礫の散乱が見られ、中には、板石、埴輪破片なども検出された。

b 第一次調査の経過

第一次調査における調査の主眼は、第一に本古墳の形態を決定すること、第二に、古墳の規模についての判定、第三に測量調査時認められた接点部の浅い溝状のおちこみの実態をつかむ

ことなどであった。以上の諸点を究明するために、主として張り出し部分を中心として、3ヶ所にトレンチを設定、合計20㎡の面積について発掘調査を行った。

第1トレンチは、張り出し部の北縁に、東西1m×南北4mにわたって設定された。このトレンチでは、北側にゆるくおちこんだ遺物包含層を検出、その最下層で多量の埴輪を検出した。

第2トレンチは、張り出しの西端付近に、東西11m×南北1mにわたって設定された。ここでは、張り出しの積土の互層が、西に、どの程度伸びているかを確認することが目的であったが、トレンチ中央東よりでは積土の互層が検出されたが、トレンチ西半では、畑の深耕などの影響で完全に土層が攪乱され、本来、古墳の積土の互層がどの程度西に伸びていたかを確認することはできなかった。

第3トレンチは、墳丘と張り出し部の接点付近に、東西5m×南北1mにわたって設定された。その結果、幅1mにわたって古墳積土を断絶した形の溝が検出されたが、この溝の埋土が表土と近似すること、および遺物包含層的な土層の検出も認められなかった点などから、この溝は近世のものであると判定した。つまり、この溝は古墳築造当初のものではなく、後世に、何らかの理由で新たに掘りこまれたものである。

以上の3トレンチにおける調査結果により、古墳の形態は、一応、前方後円墳である可能性が強く、その主軸長は40m余と判定されたのである。調査後、発掘箇所は埋め戻され、その後の対策は、昭和48年1月19日の保存問題打合せ会の決定に待つこととなった。

c 第二次調査の経過

第二次調査は、昭和48年1月19日の保存問題打合せ会の決定を受けて、古墳の全面調査をめずして実施されることとなった。調査は、京都平安博物館の伊藤玄三助教授を始め、各方面からの参加協力を得て開始された。

6月30日に、現地打合せ会を行い、7月1日から調査が開始された。

調査の大筋の方針としては、古墳全体に、3m間隔のグリットを設定して、遺物の収納ならびに調査進行中の遺構の変化を相対的に適確にとらえられるようにし、古墳部分の表土は、ベルトコンベアー3台を動員して全面的に排除して、外形の全容を現わすことを目標とした。実測は、古墳全景については、平板トラバース測量、葺石など細部については遣り形測量を実施することとした。

調査は、排土の都合上、後円部北東前方の周湟確認作業から開始された。確認された周湟は予想外に浅く、小規模なものであった。その後、墳丘の表土排除作業が開始された。作業は、墳丘上に残された、百本にも及ぶ樹木の抜根に手こずり、炎暑もあって予想以上に難航した。この作業は、墳丘東半から西側にかけて進行した。表土中からは、多量の礫が埴輪破片と共に検出されたが、浮いた状況のものが多く、原位置のものはほとんどなかった。しかし、表土排

除作業の後半になって、墳麓部において、幅1 m ほどの帯状に、きちんと積み重ねられた状況 で墳麓をめぐる葺石列が検出した。こうした出土状況は、当初あまり予想されなかったことであった。この葺石列は、墳丘西側において張り出し部の方に伸びて、本古墳が前方後円墳であることを決定づけた。

一方、葺石列の検出作業と並行して、墳頂部の探査も進められた。墳頂部には、調査の当初から、盗掘拡周辺を中心として、中小の礫、板石などの散乱が見られていた。しかも盗掘拡は、表土を排除した段階で、当初の想像以上に大きくあけられていることがわかり、実態究明の難航を思わせた。この盗掘拡の周辺を慎重に探査していくうちに、次第に、主体部の状況も明らかにされた。当初は、須恵器、土師器なども散乱し、主体部の壊滅も懸念されたが、辛うじて盗掘の厄から免れた部分から、珠文鏡、鉄器などの副葬品が発見された。

後円部の表土排除が、一応のメドがついたあと、前方部の表土排除も、ほぼ全面的に実施した。一方、調査と並行して、出土遺物の洗浄、注記、接合、一部分類、実測作業も実施した。

7月1日から7月23日までに、ほぼ表土排除作業および遺構検出作業は完了し、全景の写真 撮影などを終え、7月24日に遣り方を設定、7月25日から実測作業にとりかかり31日にほぼ完 了した。また、発掘完了時には、東北電力菅野氏の御協力により、ヘリコプターからの古墳の 航空写真撮影が行われた。

一方、調査成果の公表については、7月26日に記者発表を行い、27日には、仙台市教育委員会の経常事業として実施している「子供のための文化財めぐり」において、発掘状況の説明を行った(参加39名)。 7月28日には、地元の人々を対象に現地説明会を実施した。参加者は70名を数えた。調査後、8月1日~3日まで一部埋め戻しを行って調査を完了した。

なお、発掘総面積は、約650mに達した。

(調査後の関係者間の協議の結果、古墳の遺存状況が悪いことなどにより、本古墳の保存工作は断念され、8月23~25日にかけて裏町古墳はブルドーザーによって削平され、その命脈をとじた。)

V 調査内容

(1) 古墳の形態、規模(図版2,3,13)

古墳の形態,規模の決定については,調査前から問題のあるところであった。先ず,伊東は,前掲『仙台市史』において "高さ約5 m,径20 m許りの円墳"とした。しかし,これは目測によるもので,また,当時は樹木のため見通しも十分にはきかず,低い張り出し部分を見おとしてしまったものである。測量調査および第一次発掘調査においては,墳丘の西側に,明らかに積土の互層を有する張り出し部が認められ,一応,これを前方後円墳と判定した。その規模については,後円部が径約27m,前方部は,その先端が完全に攪乱されていて本来の規模を判定するには至らなかったが,遺存していた部分が13mで,従って,古墳全体の主軸長は40m余と判定したのであった。後円部の高さは,基底部から墳頂部分まで(表土を含めて)4.9m,前方部は約1.0m,であったが,前方部の幅は,宅地が南北両側から迫っていて破壊され,つかめなかった。

第二次調査においては,古墳の表土をほぼ全面的に排除して,古墳の形態,規模を適確に把 握することを目標とした。後円部においては,裾部において,帯状にめぐる葺石列が検出され たが、その葺石列は、後円部西側で張り出し部の方に伸びていることが確認され、張り出し部 縁辺においても,断片的ながら葺石と思われる石のならびが確認されて,この張り出し部分は, 前方後円墳の前方部であることが確定した。一方,その規模については,計測の基準の設定の しかたに、次の3通りあると思われる。第一は、墳丘裾をめぐる葺石列もしくは埴輪列の下端 をもって墳丘の先端とする場合,第二は,文字どおり墳丘,つまり盛り上がった部分の範囲と する場合,第三は,周湟を古墳の境界と考えて,周湟の内側縁を古墳の先端と考える場合であ り、裏町古墳の場合、各々について、少しずつ数値が異なっている。特に、問題なのは後円部 である。すなわち、第一の場合は、墳丘中心部(主体中央)から葺石列の下端までの半径は 11.8~12.5mとなっており,第二の場合は12.5~13.0mとなっている。第三の場合において は、16.5~17.5mである。各々の場合の後円部の直径は、23.6~25.0m、25.0~26.0m、33.0 ~35.0mとなる。一方,前方部については,前述したとおり,先端部は削除されて,本来の長 さは確認できなかったが、遺存している部分の先端と後円部中心部との距離は27.3mであった。 従って,主軸の長さは,第一の場合は,39.1~39.8m余,第二の場合は39.8~40.3m余,第三 の場合は43.8~44.8m余となる。従来, 古墳の規模などを考える場合は, 第二の場合が多かっ たようであり、ここでも一応、それにならって、本古墳の主軸長は40m余、後円部直径25~26 m,前方部遺存長は14~15mとしておく。一方,高さについては,後円部が,基底部から墳頂 部積土上面まで約4.5m であった。これも、墳頂部が盗掘などで、削平されていることを考え

あわせて、もともとは、それ以上あった可能性が強い。(主体部の底面と墳頂平坦部との高低差は50~60cm程度で、表土中に板石などが散乱していた点と考え合わせ、後世、いくぶん削平されたと思われる。)墳頂平坦部は直径10m程度である。前方部の幅は、西と南が削除されているため確定は困難であるが、北縁と中軸線との距離を南に折り返して推定すると、現存の前方部最高幅は約14m、後円部との接点付近での幅は7mである。高さは、基底部から積土上面まで最高部で0.8mである。しかし、これも表土が浅く、多少削平されている可能性もある。前方部最高点と後円部最高点との比高は約2.5mである。また、古墳の主軸の方向はW3°04′20″Nである。

(2) 古墳の外部施設

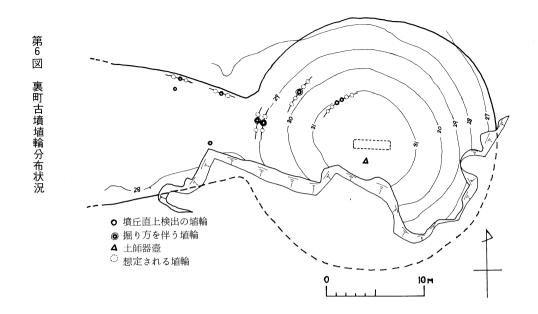
裏町古墳の外部施設として検出されたものは埴輪列、葺石、周湟などである。

a 埴輪列

裏町古墳で埴輪円筒の破片が発見されるということは、伊東の前掲著中にすでに見えている。前方部を中心として実施された第一次調査においては、各トレンチで埴輪円筒の破片が発見されたが、原位置をとどめるものは発見できなかった。表採資料としては、後円部では、墳頂部、斜面、墳麓と、随所に破片が散見した。また、かって、地主庄子春二氏は、後円部と前方部の接点付近より、半壊した小型の埴輪円筒破片を掘り出したことがあるという。

第二次調査においては、後円部を中心に、多量の埴輪破片を検出した。しかし、原位置を保つ破片は稀少で、大部分は、墳丘下半の厚い表土中で発見されたものであった。特に掘り方を有する破片はさらに少なく、埴輪列の復原は困難な状況であった。しかし、原位置に近い状況で発見された、いくつかの埴輪の出土状況から墳丘各部についての埴輪列の復原を試みてみようと思う。

まず,後円部では,墳頂部から見ていくと,掘り方を有するものはなかったが,墳丘に密着したような状況のものがいくつか検出されている。墳頂縁辺部には,完形のもの1点(これは横転した状態で検出された。)を含む2点の円筒埴輪が検出されている(図版17a)。墳頂縁辺付近では,表土中ではあるが,出土量は多かった。墳丘斜面,葺石列よりも上部では,原位置を保っていた埴輪は,1ヶ所だけ西北斜面で発見されている。これは掘り方を有する。それ以外は定かでない。墳麓,葺石下においては埴輪の出土量は多かったが,原位置を保っていたものはほとんど見られなかった。ただ,前方部との接点付近で,上下一対となって,80cmの間隔をおいて,掘り方を有する小型埴輪の底部が2点発見されている(図版17c)。 また,前述したように,地主庄子氏も,この付近から同様の小型埴輪を2,3点掘り出している,とのことで,後円部と前方部の接点付近に,やや異質の小型埴輪が何個体か設置されていたことは確実のようである。



前方部においては、掘り方を有する埴輪は発見できなかったが、前方部縁辺付近で、積土表面に張りついたような状況のものが5ヶ所で発見されている(図版17b)。また、第一次調査時における第1トレンチ周湟底より完形埴輪を含む多数の埴輪の発見を考えあわせて、前方部縁辺付近にも埴輪列があったことが想定できる。

以上の出土状況から裏町古墳の埴輪列を復原想定してみると(第6図),後円部墳頂縁辺部を めぐる埴輪円筒を主体とした埴輪列,後円部斜面中段と裾部をめぐる埴輪列,後円部と前方部 接点付近に,何個体かのまとまった小型埴輪列,そして前方部縁辺をめぐる埴輪列などが想定 できる。

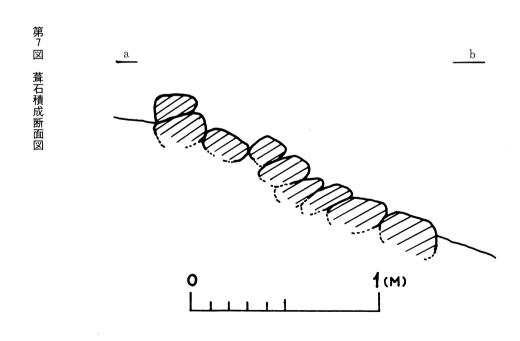
b 葺石配置状況(図版3,16)

裏町古墳に葺石がある、ということも、伊東の前掲著中にある。しかし、それが、どの部分に、どのように配置されているかは不明であった。発掘調査開始以前は、墳丘面および墳丘断面において葺石らしきものはほとんど認められなかったが、ただ、墳頂部にあけられた盗掘広の周辺にかなりの円礫が発見されたので、これらが葺石で、墳頂部には葺石がめぐらされていると考えられたが、しかし、これは、第二次調査の結果によって、主体部の積石竪穴式石室が、盗掘拡によって攪乱された際に露呈したもので、主体部を構成する石であったことが判明した。

前方部を中心に実施した第一次調査においては、葺石を配置した形跡を検出することはできなかった。ただ、周湟検出の為に設定した第一トレンチでは、周湟の埋土中から中小の円礫、

角礫が埴輪破片とともに若干発見されていたので、これは、おそらく、前方部縁辺に配置された葺石がおちこんだものであろうと考えられる。この第一トレンチにおいては、周湟埋土の下部から埴輪破片が発見され、上部から礫が発見されているので、初めに縁辺の埴輪がおちこんだあとで、葺石がおちこんだと考えられる。

第二次調査においては,墳丘のほぼ全面の表土排除を行った訳だが,その表土中において,埴輪破片とともに,多数の円礫,角礫を検出した。しかし,墳丘上半部に関する限り原位置を保って検出された礫はほとんどなかった。本来の葺石列は,墳丘裾部を帯状にめぐるような状況で検出された。検出面は,表土下50~60cmで,表土排除以前は,こうした配置状況は,全く見当がつかなかった。墳丘裾部をめぐる葺石帯を平面的に見ると,後円部においてはその幅は,約1.5~1.7mでほぼ一定した幅である。 また葺石帯の垂直幅, すなわち高さは約60~80cmである。葺石帯の下端と墳丘中心部間の距離は11.8~12.5m,葺石帯の上端との距離は10.3~11.0mの範囲内にある。墳頂部と葺石上端との高低差は210~250cm,同じく葺石下端との高低差はは270~320cmであって,葺石の配置が一定の企画のもとに実施されていたことが伺える。さらに葺石の積み方にも,きわめて規則正しく整然たる状況が認められた。すなわち,直径20~30cmの,同じような大きさの円礫ないし角礫(川原石)を下から上へと墳丘面に沿った傾斜できちんと積みあげているのだが,上下一列に要した礫の数もほとんど8~9個と一定しているのである(第7図)。後円部の東半部をひととおりめぐった葺石列は,後円部の西側,前方部との



接点付近において 2 方向に分岐する。一つは,そのまま後円部の裾部をめぐりきってしまうもの,もう一つは,後円部裾部のカーブから離れて前方部縁辺方向に伸びていくものである。前者の葺石の検出状況は,やや乱れた感じではあるが,これによってともかく,後円部裾部の葺石列は完全な円形を描いて施されていることが確認され,先の埴輪列の状況と考えあわせて,後円部と前方部を分離するかの印象を与えるのである。一方,後者の前方部縁辺沿いにのびる葺石列は,一旦,後世の溝によって中断した後,点在したような状況で検出されている。このうち,後円部との接点付近が,最も遺存状況良好である。葺石の大きさは,ほとんど後円部の場合と同様であるが,その積み方は,前方部が低いからであろうが,後円部の場合よりは小規模である。すなわち,円礫ないし角礫を2~3個ずつ,平面的には,巾40㎝前後,高さ12~18㎝で,前方部縁辺の傾斜に沿うような形に積み重ねられていた。

以上のように裏町古墳で検出された葺石は、後円部裾部、前方部縁辺部に限って検出され、 その他、後円部上半部、前方部平坦部などでは検出されなかった。こうした配置状況は、やは り、土留めなどを主目的としていることが考えられるのである。

c 周湟(第8図, 図版19)

周湟については、調査以前は、地表面からその徴証を認めることはほとんどできなかった。 わずかに後円部北西および北東におちこみ様のものが認められはしたが、それも、第二次調査 の結果、後世における攪乱によるものであることが判明した。

第一次調査および第二次調査では、前方部周縁に2ヶ所、後円部周縁に3ヶ所、合計5ヶ所にトレンチを入れて周湟の検出に努めたが、周湟自体の深さが予想外に浅く、また、畑の深耕などの形跡が意外に大きく、周湟の実態把握は容易ではなかった。

後円部では,墳丘東麓,北東麓,北々東麓に各々トレンチを入れて周湟の検出に努めた。このうち,最もよく周湟の形跡を把握できたのが,東麓であった。もっとも,把握できたのは,周湟の内側縁と湟底の一部についてであり,周湟の外側縁は把握できず,従って,周湟の幅などは確認できなかった。北東麓には $1 \times 10 \, \mathrm{m}$,北々東麓には $2 \times 14 \, \mathrm{m}$ と、いずれも,墳丘中心から放射状方向に長いトレンチを配したが,周湟外側縁はつかめなかった。一方,第一次調査において,前方部北麓に $1 \times 4 \, \mathrm{m}$ の北に長いトレンチ(第 $1 \, \mathrm{h}$ トレンチ),西麓方向に $1 \times 11 \, \mathrm{m}$ の西に長いトレンチを設定した。

後円部において検出された周湟内側縁は、墳丘中心部からの距離約 $16.7\sim17.0$ mで、墳丘を円形にめぐるような状況で検出された。しかし、それは、墳丘裾部に接するような形で検出されたのではなく、墳丘裾部から $3\sim4$ mほど外側から周湟は掘りこまれていたのである。なお、葺石帯下端から周湟内側縁までの距離は5m前後である。前方部北側の周湟は、ゆるやかな傾斜をなしていて、内側縁を把握することが困難だったが、埋土の状況などから、前方部周縁葺

石列の北方約2.5m付近と考えられる。

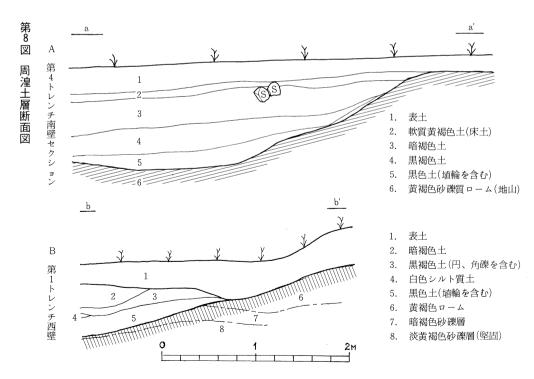
周湟の深さについては、各トレンチで差異が認められ、後円部東麓においては80cm、後円部 北東麓および北々東麓では25cm、前方部北側では30cmで、概して予想以上に浅いものであった。

周湟の断面形態は,外側縁の状況がつかめないため,確定できないが,内側縁の状況などから見て,幅の広い逆台形と考えられる。周湟は,旧表土層である黒褐色土層と黄褐色ローム層を掘りこんでおり,底面は淡黄色砂礫層に達していた。この砂礫層は,ツルハシをもはねかえすほど堅固な砂礫層で,周湟の深さが必ずしも一定していなかったのは,この砂礫層の高低差によると見ることもできる。つまり,古墳周辺の基盤は,西北から東南へと傾斜しており,西北部の方が砂礫層面が高く,周湟底も高くならざるを得なかったと考えられる。ちなみに,前方部第1トレンチと後円部東麓のそれぞれの周湟底の絶対レベル差は2m余もあった。

ところで、周湟の規模は、外側縁がつかめなかった為、確認できなかったが、今、墳丘にもられた全土量が周湟から掘り出されたと仮定して、当初の周湟の幅を想定してみよう。

今,墳丘のおよその土量(Q) = $\{(墳丘底面積×高さ)+(墳頂面積×高さ)\}$ ×½とする。この場合,墳丘底面積=(墳丘半径) 2 ×3.14,墳頂面積=(墳頂半径) 2 ×3.14である。

次に,周湟から掘り上げられた土量(P) = $\{(B湟上面積×高さ)+(B湟面積積×高さ)\}$ ×½とする。この場合,周湟上面積= (周湟外側縁面積 - 周湟内側縁面積) = $\{(B湟外側縁半径)^2 \times 3.14\}$ となり,同様に,周湟底面積= (周湟外側縁半径 - 2) $^2 \times 3.14$ - (周湟内側縁半径 - 2) $^2 \times 3.14$ となり,同様に,周湟底面積= (周湟外側縁半径 - 2) $^2 \times 3.14$ となる。※ 2 は,周湟の上面幅と底面幅の差である。



以上からP=Qであり、また、周湟外側縁半径をxとして計算してみると、 $x=29.5\,(\mathrm{m})$ である。

周湟の幅(O)は,周湟外側縁半径-周湟内側縁半径であるから,

(O) = 29.5 - 17.0 = 12.5 (m) となる。

以上は、あくまでも試算によるものであり、推測の域を抜けない数値であるが、いずれにし ろ、広く浅い周湟が掘られていた、ということはいえそうである。

(3) 墳丘築成状況(図版4,15)

墳丘の築成状況に関しては、調査以前に、すでに後円部の断面が、基底部ローム面に達するまで垂直に削除されて露呈しており、積土の互層などがよく観察できた。また、第一次調査の結果、前方部にも積土が認められ、本古墳全体の築成が、盛土によるものであって、自然地形の加工によるものでないことは明らかであった。

墳丘の築成について考える前に、本古墳の占地の状況について考えてみたい。すでに述べてきたとおり、本古墳は、三神峯丘陵の南麓に前方部を西向きにして築成されたものであった。つまり、丘陵の等高線とほぼ平行方向に築成されたのである。海抜は基底部を基準として27mで背後の三神峯丘陵(標高67m)との標高差は40m、古墳東南方に広がる西多賀耕土(標高14m)との標高差は平均して13m前後である。こうした状況は、現在の林立する宅地化の中では容易に想像しにくいことではあるが、往時、西多賀耕土から三神峯丘陵の方向を見上げる時は、その裾部にくっきりと二子山状の姿が見られたことと考えられる。しかも古墳からは、西多賀耕土をはるかに望見できる。してみると、本古墳の占地の仕方は、かなりの程度、視覚的効果を意図したものであることが考えられる。仙台市南部、長町から西多賀にかけての丘陵裾部には、壊滅したものも含めて、同様の占地をしているものがかなり多い。むしろ、丘陵上に占地する古墳が稀少である。その理由として、一つには、西多賀耕土の集落と丘陵上とでは、やや隔絶しすぎているということが考えられるが、あるいは、大和町八谷館跡で主体部だけが検出された古墳が発見されている如く、近世以前に、かなり大規模な築城工事がなされ、その際に古墳が壊されて現在は発見されていない可能性もある。その可能性は鬼塚の北西にある中世の山城、茂ケ崎城跡の場合に考えられる。

次に、古墳自体の積土の状況について考えてみると、後円部、前方部ともに、黄褐色ロームと黒色土とが、各々数cm前後の厚さで互層を形成している。それを細分すれば、古墳全体では、数十層にもおよぶ積土層を形成していることになるが、粒子や含有物などにより大きく見ると、基本的には7~8層くらいの大きな互層から形成されている。各層は、おおよそ水平に近く積成されている。

次に、各層の状況を下から順次見てみると、基底部は、黄褐色ないし黄灰色ローム層の上に、

厚き30cm内外の,固くしまってきめ細かい黒褐色の旧表土層が覆っている。この黒褐色土中からは,ごく少数ではあるが,時期不確定の縄文土器(晩期かと思われる)片が出土する。この層の上に古墳の積成が行われている訳であるが,積土と旧表土の境目付近に,部分的ではあるが, $2 \sim 3 \, \mathrm{cm}$ の薄い炭の層が認められた。時折,焼土粒などもその中に混入していた。これは,古墳積成以前に,野焼きのようなことが行われたことを示すものかもしれない。

積土層を大きく見ると,黒色土と黄色土とが,きめ細かく整然たる互層を形成する層,中に礫を含む層,および砂礫の混入が顕著なきめ荒い層とあり,大別して,この3層が互層を形成して古墳を形ち作っている。とくに,墳頂から80~100cmの最上層は,ほとんど黄褐色砂礫層に近い積土層で,以下の層と明らかに一線を画し,積成の時期ないし技法のちがいを物語っている。主体部は,ちょうど,この最上層の中に築成されていた。このことは,内部主体と墳丘の築成とが、時期的ないし技法的に別の段階で行われたと考えてよいのではないかと思われる。

前方部については、整然たる(砂礫混入の少ない)黒色土と黄色土の互層によって積土が形成されていた。前方部と後円部との先後関係については、接点付近が後世の溝で切られて積土が断絶していたため明らかでないが、前方部の積土の状況と、後円部最下層の互層と類似する点から、あらかじめ前方部と後円部の最下部が同一レベルで積成された後、後円部だけが、高く、念入りに積成された可能性が考えられる。

(4) 内部主体(図版5,18)

a 内部主体の形態・構造

本古墳の内部主体は,河原石積の竪穴式石室であった。

石室の位置は,後円部のほぼ中央にあり,長軸を東西方向としている。方位は,磁針でW3°04′20″Nを計った。この方位は,古墳の長軸が東西方向であることに応じたものとなっている。石室の置かれた深さは,床面までをはかれば現墳頂下約 $1\,\mathrm{m}$ であった。ただし,石室の上部は盗掘などで破壊されていたし,調査時における墳頂部が原形を保っていたとは思われないので,元来は $1\,\mathrm{m}$ よりも深かったろうと考えられる。

石室は、検出された状態では南西部を大きく破壊されていた。けれども、幸にも石室の北壁と北西隅の部分が知られ、破壊を免れていた東部からの測定を可能にした。

この石室は、東西約5m,南北約2.5mの東西方向に長い長方形墓址の中に築かれていた。 墓址は、墳頂部積土に掘り込まれたものであり、表土除去後明確に知られた側壁での深さは70cmである。

石室は、この墓址の内部に河原石を積みあげて作られているが、河原石の積みあげは2段目ほどまでしか安定した残りを示しておらず、それより上方は乱れていた。それゆえ、石室側壁が明確なところであっても床面より20~30cmほどの高さまでが知られた程度であり、それ以上

は盗掘と崩壊に災されていた。この石室構造に用いられた河原石は,長径15~50cm,厚さ30cm 前後の長目の,比較的扁平な河原石であった。おそらく,近傍の名取川などより運ばれたもの と思われ、安山岩質の丸味を帯びた石である。

石室の大きさは、良好な遺存部分において測定すると東西3.6m、南北0.8mで、長方形である。側壁は、必らずしも整った並び方をしているわけではなかったが、一応小口積を原則としたものと見られる。しかし、乱積状の部分も認められた。ちなみに各側壁の石の積み方を述べれば、東壁においては基底に河原石を横積みにし、2段目は石室内に向けて小口面を揃える形で積んでいる。北壁でもやはり基底には横積みに河原石を配していたが、部分的には小口積を示しているところもあった。これらに対して西壁の場合は、基底から2段まで長目の河原石を横積みとしていた。また、南壁においては不整形の石を小口積状にしているが、盗掘拡の断面に観察されたところでは横積みによっているものもあり、厳密に揃えられたとは思えないものがあった。ともあれ、石室基底では石の面を揃えて配しており、その原形は東・南・西の側壁で良く知ることができる。ただ、北壁の大部分は盗掘が及んでおり、基底線に出入があった。この石室側壁から墓址壁までには、南壁断面の観察では4列ほどまで横積み状の石を置き、その外方では乱積みである。他の側壁の後詰の石をみても、ほとんど整った様相は認めにくかった。このような側壁の石積状況となっているのは、石室構築の原則の不徹底もあったかも知れないが、石材にも恵まれなかったことが考えられる。

石室床面は,直径15~20cmの扁平な河原石を一面に密に敷き並べ,その上に径 5 cm前後の礫を敷きつめていた。発見された遺物は,この礫上に認められた。

この石室では、調査時にかなり多数の乱された河原石を除去したが、その間及び墳丘上で若干の板石が発見されている。遺存した板石は一辺30cm前後、厚さ5cm前後のものであった。当初は、箱式石棺などの破砕された石材かとも考えられたが、この古墳では竪穴式石室以外の埋葬施設は全く認められなかった。それゆえ、この板石もまた竪穴式石室と関連するものと考えるのが妥当であろう。そう見れば、この板石は、石室の上部を覆った蓋石の遺残であった可能性が強い。おそらく数度の盗掘などに際して破壊・散乱せしめられた蓋石の一部であろうと考えている。

以上述べてきたように、この古墳の内部主体は、築成後の封土を切り下げて掘られた長方形 墓址内に河原石で築かれた竪穴式石室であった。石室側壁は小口積を主とする石積みで積み上 げ、床面には大形扁平の石を並べた上を小礫で敷きつめたものであり、天井部は板石をもって 覆っていたものであったと推測される。

b 内部主体における遺物の出土状況

竪穴式石室内からは、小形珠文鏡1面、鉄刀子1口、鉄鏃1本が発見された。この3点の遺

物は,先に述べたように石室内床面の小礫上に見出されている。礫上には比較的サラサラした 褐色の流入土が4~5cm認められ,遺物を覆っていた。

珠文鏡は、石室東寄りにおいて見出された。その位置は東壁より西へ約1 m,南壁より北へ約50cmであり、石室中央部に向って傾斜をした形で出土している。鏡面は下であり、文様のみられる背面を上としていた。発見時には鏡背面は全面緑色の銹でおおわれていた。下面となっていた鏡面には木質が薄く銹着していた。木目の方向は東西方向に走っており、木棺遺残が附着したものと観察された。

鉄刀子は、鏡の出土個所より東南約50cm離れたところで発見された。刀子の把は北側にあり、 刀身は南向きに置かれていた。刃部は西向き、すなわち石室中央に向って配されている。

鉄鏃は、石室西北隅に発見されたが、出土状況は確認できなかった。石室床面直上まで達している盗掘の際に動かされている形跡があり、原位置を保っていなかったものと見られる。

これら3点の石室内遺物の出土以外に、墓 拡の南縁 中央部において大形の土師器が見出されているのが注目される。この壺は、胴部片側のみが原位置で発見され、他は破片となって盗掘拡などより見出されている。胴部の出土状態よりみて、この壺は墓址縁にほぼ南北方向に据えられていたものであったとみることができる。出土の深さは、表土約20cmを除去後であった。

そのほか、石室検出段階までの盗掘拡及びその周辺の調査において数個体分の須恵器破片並びに糸切底土師坏破片などが発見されている。これらのうち、須恵器破片は墳頂から盗掘拡内まで広く発見されているが、特に注目されたのは墓拡西縁附近であった。あるいは、須恵器の一部のものはこの前方部に向う墓拡西縁に置かれたものかも知れないが、原位置を示すと思われるものは見出せなかった。

糸切底土師坏は、主として盗掘拡内で見られ、特に墓址北半の黒色土中では復原可能のもの も認められた、

なお、石室内の流入土上に数cmの若干固くしまりを有する土層が見られ、その層には黄褐色 粘土粒や土師器小破片を含んでいた。土師器小破片中には高坏脚部破片も認められているが、 土と共に移動されたものであろうと観察された。

これら遺物の出土状態からみて、竪穴式石室内には、鏡・鉄刀子・鉄鏃のみしか見出されなかったけれども、おそらく他に推測される玉類などは盗掘によって失なわれてしまったものであろう。しかし、鏡や刀子の出土状態からみてこの石室内における被葬者の位置は、頭部を東としていたものと考えられる。この石室内では、土器類は内部には置かれず、石室外に配されていたふしがある。明らかに知られたのは墓城南縁の土師器壺であり、西縁附近に散在した須恵器もまたその可能性を示している。これら石室外に見られる遺物は、石室築成後にそなえられたものと見られる。

(5) 出土遺物

本古墳からの出土遺物は、総量、平箱(60×44×10)にして40箱分に近い。そのうちの約8割は埴輪が占め、その他には、後円部主体部周辺から出土した珠文鏡、鉄製刀子、鉄鏃各1点、須恵器、土師器などの土器類、および片口中世陶器1点などがある。

a 埴 輪 (図版 6, 7, 8, 21)

埴輪は、後円部、前方部の墳丘面および周湟底などから数多く出土し、総量平箱30箱分以上に達している。しかし、調査結果でも見られたように、原位置を保つ埴輪が少なかったせいか、完形品もきわめて少なく、全形実測可能なものは数個体にすぎず、いずれも筒形円筒埴輪である。その他の破片のほとんどが、筒形円筒埴輪か朝顔形埴輪のいずれかであった。形象埴輪は全く見られなかった。

① 形態的分類所見

大別すると, いわゆる筒形円筒埴輪 (I類),朝顔形埴輪 (II類) とに分類できる。 〈筒形円筒埴輪 (I類)〉

文字どおり、中空筒形円筒形のもので、口縁部>体部>底部といった順に徐々に直径が広がるタイプである。体部には、2本の凸帯が施され、凸帯の間には、表裏一対の透かし孔が穿たれる。このうち、大きさと色調の点で2つに分けられる。一つは、高さ $40\sim50\,\mathrm{cm}$ 、口径 $25\sim30\,\mathrm{cm}$ 、底径 $20\sim25\,\mathrm{cm}$ 、橙褐色ないし黄褐色で大型のもの(図版 $6-1\sim4$; $21-1\sim2$)、他は、完形品が見られないが、推定高 $30\,\mathrm{cm}$ 前後、推定口径 $20\sim25\,\mathrm{cm}$ 、底径 $10\sim15\,\mathrm{cm}$ のもので、前方部一後円部接点付近に集中的に検出された灰褐色の小型埴輪である(図版1-3; 1-3)。量的には、前者が圧倒的に多く、出土範囲もほぼ全域にわたっている。

次に,各部の特徴についてまとめて見ると,口縁部はいずれも外反する形態をとるが,その口唇部の形態において 2 つのタイプがあることが指摘できる。(4) 一つは,口縁が一定の厚さのままゆるく外反し,口唇部が中凹して完結するもの(図版 $6-1\sim4$),(中)他は,口唇部が強く外反し,内側が中凹となるものである(図版 $7-1\sim2$)。前者がもっとも多いタイプで,後者は少ない。

体部,底部に関しては,朝顔形埴輪の破片も含まれているかもしれないことを,予め記しておかねばならない。体部には, 2 本の凸帯とその間に穿たれた表裏一対の透かし孔が認められる。凸帯の数が 3 本以上のもの,透かしが一対以上のものなどは見あたらなかったようである。凸帯は,ほとんどが,幅 1 cm前後, Σ 形のものであるが,変形形態として Σ 形のものが 1 点認められた。(図版 7-1)透かしの形態としては,円形のものと方形のものとの 2 種類が認められたが,個体数としては,圧倒的に前者が多い。後者も隅丸気味の方形である。これらは,いずれも整然たる形状を呈し,歪んだものは少ない。透かしの直径は $6\sim7$ cm前後である。透かしの位

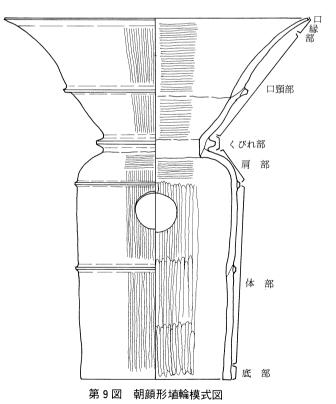
置は,上部凸帯と下部凸帯のほぼ中間やや上方に穿たれていることが多いが,時には,上部凸帯の直下に接するような形で穿たれているものがあり,特に方形のものにそれが多いようである。また,透かし孔を中心として,2本の平行沈線の刻まれている破片も若干認められた。底部は主として2種類ある。一つは,ほぼ直立し,底面付近がやや肥厚するもの(図版 $6-1\sim3$),そして内向するものとある(図版7-3)。前者のタイプが圧倒的に多いが,後者は,特に,小型埴輪に顕著である。なお,表面に朱(ベニガラ?)を塗布した破片がしばしば認められたが,すべて,口縁部,体部の破片にのみ限定され,底部で朱を塗布しているものは皆無であった。塗布してあるものも,すべて破片の外側にのみ限定され,内側に塗布した破片は見あたらなかった。完形品の状況から,朱の塗布部位について考えてみると,体部の下部凸帯以上の部位に限定して塗布されたようである。

〈方筒形埴輪〉 (図版 7 - 2; 21 - 4)

前方部縁辺部で発見された破片で,わずか 1 個体分しかない。口縁部および体部上半まであるが,底部を欠失している。横断形が隅丸方形を呈するものである。色調は灰褐色で口縁部の形態は,I 類-(α)と同様である。タガは α)と同様であるが,タガの直下に方形の透かしが穿たれている。

〈朝顔形埴輪(II類)〉(図版7-4,5;21-5)

朝顔形埴輪の完形品は今回の調査 では検出されなかったため,全形に ついての詳細な記述は不可能である が, おそらく, 底部および体部下半 はI類とほとんど区別つかないもの と思われ、II類の形態的特色は、口 縁,口頸部および体部上半(肩部) に集約されると思われる。 つまり、 筒形円筒形の体部が, その上端にお いて, 内側に屈曲した上に, 外に大 きくラッパ状に開く口頸, 口縁部を 有するものであろう(第9図)。 そう した基本的形態に関する変種はほと んど認められなかった。口縁、口頸 部は、体部との接点であるくびれ部 分からL字形, つまり垂直に近く立 ち上がり, 次第に大きく外反するカ



ーブを作るが,一旦,口頸中央部,つまり凸帯のある付近で内弯するカーブを描いたあと,再び一定の外反するカーブをたどって口唇部に達している。口唇部の形態はI-(I)のタイプがほとんどである。口頸部には,体部との接点であるくびれ部分に一本の凸帯がめぐっているほか,口頸部の中間に一本凸帯がめぐる。幅は1 cm前後である。透かしはついていない。一方,体部上半(肩部)は,体部下半から垂直に上がってきて,鋭く内弯するカーブを描いて,ほぼ水平にくびれ部分にとりついている。この部分には,透かし,凸帯などはない。口頸部における凸帯の形態は, Σ 形のものがほとんどだったが,くびれ部をめぐる凸帯の中には, ∇ 形のもの,図版 8 A - 3),C形のもの(図版 8 A - 2)などが若干見られた。

②成形、調整技法および焼成などに関する所見

A 成形,調整技法

〈筒形円筒埴輪(I類)〉

成形は基本的には粘土紐巻上げによっていると考えられるが、器表の内外とも全面的に入念 な調整が施されていて、ほとんどの破片について巻上げの痕跡を探ることは容易でない。

次に、個々の調整について見てみると、①巻き上げの回転方向などは不明である。 ②透かしの穿孔は、ほとんど例外なく、埴輪を正立した場合の中央部よりいく分高位に、表裏ほぼ同レベルで穿孔されている。孔壁はきれいにナデ調整されているものが多い。 ②刷毛目調整(図版8B)は、埴輪外面ほぼ全面にわたって、入念にしかも規則正しく施されている。刷毛の方向は、ほぼ直立するものが大部分だが、中には右傾もしくは左傾するものが若干あり、稀には水平方向の刷毛目も認められる(図版8B-2)。こうした変種は、主に口縁部の破片に認められた。刷毛目の種類は、その密度から考えて3種類ほどあると見られる。すなわち、1 cm幅あたり5~6本のもの(図版8B-1 イ)、7~8本のもの(図版8B-1 ロ)、10~12本のもの(図版8B-1 ハ)と見られたが、このうち、最も多く認められたのが第一の刷毛目である。第2、第3の刷毛目は、ほぼ同数認められたが全体的には数少ない。 ②凸帯は、円筒埴輪一個体につき2本、あたかも円筒埴輪を3等分するかの如くめぐっている。3本以上のものや1本のものは認められなかった。上下凸帯の間隔は15cm前後であり、間に透かしが位置するようになっている。金ナデ調整は、外面に関しては、主として口縁部および凸帯の上下に横方向に施されている。この際の調整は指ナデではなく、竹ベラなどの調整具によると考えられる。それは、調整

面にでく薄くはあるが、一定した横線が認められるからである。内面に関しては、口縁部から体部上半にかけて、特に入念なナデ調整が行われている。この場合のナデ調整には、前述のような一定した横線は認められず、従って調整具によるナデではなく指ナデ調整と考えられる。体部下半から底部にかけては、ナデ調整はほとんどなされず、タテのヘラケズリ痕跡が残されたままになっている。なお底面は、全体の破片の%くらいが無調整で、直径1 cm程度の、おそらく竹と思われる棒の圧痕が $4\sim5$ 本ついているものがあり(図版8A-1)、埴輪の成形もしくは乾燥が数本のシノダケを敷き並べた上で行われたことを暗示する。他の破片は、これを削りとって調整している。

〈朝顔形埴輪(II類)〉

朝額形埴輪の特色は,口頸部および体部上半に集約されており,それだけ複雑な成形,調整がなされている。すなわち,朝額形埴輪の成形には,第9図のように,3つの成形単位の接合が考えられる。今,それぞれの部分の名称を(イ)口縁部(の)口頸部(ハ肩部としておく。成形,調整の工程は I 類と同様である。個々の調整の状況を見てみると,〈刷毛目調整〉は,外面(イ),(の)にかけては,ほとんど直立方向の刷毛である(図版 8 B - 3)。右傾もしくは左傾の刷毛が若干混じる程度である。(ハの肩部は,逆に水平方向の刷毛がほとんどで,直立もしくは斜めの刷毛は少ない。しかし,肩部から体部に移ると直立方向の刷毛となる(図版 8 B - 4)。内面は,口縁,口頸,肩のいずれも水平方向の刷毛がほとんどである。刷毛目の種類は,I 類同様 3 種類あるが,1 cm幅あたり5~6本のものがほとんどで,あとは少ない。〈凸帯〉は,口縁部,口頸部に,上下2本あることは前述したが,幅が下から上にいくにつれ厚くなるに対し,厚さは逆に薄くなる点が注目される。〈ナデ調整〉は,I 類同様口縁部および凸帯の上下に施されている。これはやはり,竹ベラ様の調整具による。内面には,第一次調整として横ハケが施されるのがほとんどであるが,(イ)→(ロ)→(ハ)と下にさがるにつれ,ナデ調整もしくは (ヘラ) ケズリ調整を行っているものが多くなる。

B 燒成, 色調

焼成上から見ると、主として I 類, II 類共通して 3 種類に分けることが可能である。第一は,埴輪特有の橙褐色で,固くしまった焼きのもの,焼成温度は1000℃前後であろうか。第二は, 黄褐色ないし黄色のもので,焼きも弱く,やわらかい感じのもの,焼成温度は土師器より若干 高い 800 ℃程度と見られる。第三は,灰色ないし灰褐色をしたきわめて硬質のもので,いわゆる陶質の埴輪である。おそらく焼成温度は1000℃を越えているであろう。もっともよく見られるのは第一のもので,これが全体の%を占め,次いで第二のもの,第三のものは数点認められた程度であった。

b 須恵器 (図版 9 - 1 ~11;22)

須恵器は,後円部盗掘拡周辺から集中的に出土した。完全に盗掘の厄にあってしまった為, 完形品は存しない。比較的まとまりをもって,ある程度原形を推定できる破片は11点を数える。 以下列挙すると,①横瓶1個体(体部,底部,口頸部)②台付壺?1個体(体部,脚部)③壺? 3個体(体部)④ 횮2個体(体部,口縁部各1点)⑤台付壺4個体(脚部)などである。

①横瓶(図版 9-1):暗青灰色で焼成は良好。円筒形の両端を閉じて横だおしにした,いわゆる俵形の器体の,一側の中腹部に口頸部をとりつけたものである。器厚は,口頸部付近の体部では $7 \sim 8$ mm前後だが,体部両側端に近づくに従い厚くなり,両端では,最大 1.5 cm前後になる。成形は基本的には巻上げ成形によっている。口頸部は失われていてその形態は不明だが,体部の口頸部との接合部分には,直径 4.5 cmの円孔が穿たれている。体部外面には,両端部を除き,全面的に叩き目を残している。内面は,全般的にやや粗い指ナデ調整が施されている(部分的に指紋なども残されている)。特に,両側端の内面では,粘土をしばり切った際の,いわゆる \hat{b} はずり目痕跡がはっきりと残っている。全形の推定法量は,両側端の幅約70cm,体部の中心での直径約35cm 4.5 らいである。

② 台 付 壺 ?(図版 9-5; 22-1) :口頸部が欠失している為,全形の復原は困難である。色調は灰色ないし灰白色で,焼成はよくない。一見,生焼けのように見える。壺の底部と思われる部分の下に,透かしを有し斜め下方に開く脚の上半部を有する。壺と見られる上半部は,丸底気味の扁平な底部を有する。脚部は,裾部に移行するにつれ,開いている。脚部の最上部(すなわち壺との接合部)での直径は約10cmである。器厚は,上半部が $0.7\sim1.2$ cm,脚部が $0.9\sim1.1$ cmである。成形は巻上げ手法によっている。外面には,ロクロ使用の横ナデ調整痕が見られる。内面には,やや粗いナデ調整が施されている。脚部には,入念なナデ調整が施されている。そして,横1cm,縦4cm以上の長方形の透かしが4cm間隔についている。透かしが何段になるものかは,脚部下半が欠失している為不明である。

③壺?(図版9-4,6,7):いずれも体部上半の破片で3個体分ある。7は,灰白色の生焼け気味のもので成形は巻上げ手法によっている。外面の調整は,第一に刷毛目で行い,その上を,櫛目による平行沈線および波形沈線による文様が,ごく薄く描かれている。球形に胴張りした器形で,体部の直径は19.2 cmと見られる。6も同様の器種である。4は,暗灰色ないし黒褐色の焼成きわめて良好で,やや光沢をおびた破片である。小型で,球形に胴張りした体部の推定直径は10 cmである。器厚も薄手で0.5 cm程度で,裏町古墳出土の須恵器中では,かなり異質のものである。

④選 (図版 9-2, 3; 22-2, 3) : 3 は体部上半部の破片であるが,灰白色で生焼け気味であることは,②および③の 6, 7 などと同様である。成形は巻上げによっているが,横瓶などと同様,体部の一側に口頸部がとりついている。体部の推定幅が直径14.5 cmに対し,口

頸直径は4.8cmで比較的小さい。体部の中央やや上部に径1cm程度の円孔が穿たれている。外面は全面に、口頸を軸線とした場合の直立方向の刷毛目が施され、その上に、一定の間隔をおいて波形櫛目文が薄く描かれている。内面には、上下方向のナデ調整痕が施されている。2は、口縁部破片であるが、暗灰色で焼成は良好で固い。形態としては、口頸部が垂直に立ち上がった後、外側に鋭く屈曲し、やや内弯しつつ立ち上がって口唇部に達する避特有の口縁部である。口頸部には、櫛目による小波形文が施文されている。器厚は0.6cmで薄手である。口唇部直径は8.5cmである。

⑤ 脚部 破片 (図版 9 - 8 ~11; 22 - 4 ~ 6):脚部のみの破片が 4 個体分出土している。主体部分は不明である。10は,脚端部が欠失していて全形は不明だが,現存高16cmとかなり大型である。色調は灰白色だが焼成は良好である。 4 段に及ぶ方形の透かしを有する。透かしのない部分には,櫛目による波形文が薄く描かれている。11は,体部との接合部から脚端部までそろっている。高さは12.5cmある。器形としては,裾部に移行するにつれ,直線的に広がるが,脚端付近では,外反気味に開く。最下端は尖端化し,外側にツバのように飛び出すかえしを有する。透かしは,細長い長方形のものが一段,四ケ所に穿たれている。文様は,櫛目による波形文と2本の沈線の組み合せによる。脚端付近には文様はない。 8 は接合部付近が欠失している。形状,文様などは11に類似する。脚端付近にまで文様が及んでいる。 9 は脚端のみの破片である。 8,11の脚端が,ゆるく外反する程度だったに対し,強くL字形に外反している。脚端の推定直径31.4 cmで,かなり大型の器形と見られる。脚端やや上方に2本の凸線がめぐっている。焼成は良好である。

c 土師器 (図版 9-13, 14)

土師器は,後円部盗掘拡付近から,壺,高坏と思われる古手の土師器の他,内黒の坏が4個体分出土した。

1) 土師器壺 (図版8A-4)

原位置を保って検出されたのは体部のみであるが、付近から同一個体と思われる口縁部、底部破片が断片的ながら出土している。色調は黄色で、全体の大きさは、各部が断片的であるため見当がつかないが、口縁部の推定直径23cm、体部の推定最大径35cm、推定高45cmでかなり大型のものである。この壺について、次のような特徴が指摘できる。器形が大型であること、器厚が1cm前後と厚手であること、比較的固くしまった焼成であること、出土部位が主体部外縁部であって副葬品とは考えられないことなどである。口縁部は二重口縁で外反する。体部は、ほぼ球形に近く胴張りした形態をとる。底部と思われる破片は、宮城教育大学考古学研究会太田昭夫君が調査以前に本古墳墳頂盗掘城付近から表採した資料である。底面直径10cm、器厚1~2 cmで底部中央が内側に凹んでいる。穿孔された形跡はない。

②高坏:細片の上,摩滅と風化が著しく,全体の復原は困難である。一応,口縁部,体部,脚部と見られる破片はあるがいずれも細片である。色調は橙褐色でやわらかい。口縁部は,水平よりやや斜め上方に開く形態をとる。脚部は,末広がりの形態であるが広がりの幅は小さい。 ③坏(図版 9 -13, 14):4個体分あるが,いずれも内黒,ロクロ成形,糸切底のものである。うち一点は完形である。器形はいずれも類似し,平底から斜め上方に内弯気味に体部が立ちあがり,口縁部は,若干外反気味に開いて完結する。いずれも底部を部分的に手持ちヘラケズリしているほか,外面を指ナデ調整で仕上げ,内面はヘラミガキ調整を施して仕上げている。

d 珠文鏡 (図版10A-1;23-1)

直径 9 cmの小形青銅鏡である。厚さは縁端部で2.5mmをはかるが,薄い部分では1.5mmである。 鏡の周縁では反りを示し,縁端では3 mmに達している。鈕径は1.8cm,高さ8 mmである。

この鏡は、発見時には背面は全く銹でおおわれていた。正面は、木質の銹着が認められた。背面の緑銹を除去したところ、良好な文様が見られ、鮮明な朱が附着していた。鈕には、鈕孔を貫いている緒が認められた。また、その緒の延長の一部が他に2個所で遺存しているのが見られた。鈕孔に見られる緒は、径4mm前後のRl1段の繊維からなるものであったが、細い糸からなる点で絹糸である可能性がある。

鏡背面の文様は、一種の珠文である。鈕の外周をめぐる細い圏線の外側には、13個の珠文が認められる。珠文は、それぞれ右まわりの方向でめぐった時に尾をひいた如く、やや長円形の形であり、短径 3 mm、長径 5 mm前後のものである。この珠文帯の外周には、幅 5 mmの断面半円形の太い凸帯がめぐっている。この凸帯と周縁の間には外方に向いたこまかな鋸歯文様がある。鋸歯文は概して不鮮明であるが、3 個所で比較的良く知られる。鋸歯の数は約120 本ほどである。縁端部は次第に厚さを増し、断面三角形状を示している。

この背面文様上には、鈕をはさんで2個所に型キズと思われるものが認められる。その一つは、一見頭部と身部からなる獣形状のものであり、凸帯と鋸歯文帯の間にあり、他は長方形状のもので、鋸歯文帯に及んでいる。

e 鉄製品

1) 鉄刀子(図版10A - 3;23-2)

鉄刀子は、現存長12.5cmをはかる。把は茎を残すのみであり、刃部もまた鉄銹におおわれている。茎の長さ3.8cm、刃部長8.7cm、刃部幅1.8cm、背幅2.7mmであった。茎と刃部が明確に分れ、関を形成している。この関の部分で、土圧のため片面に屈折している。刃部の幅は比較的広い刀子である。茎には、把の遺残と見られる黒色を帯びた多孔質物質が附着している。これはおそらく有機質系の把材の痕跡を示すものであり、鹿角などが用いられていたのではないか

と推測される。この茎では鉄銹がそれほど著しくないが、刃部では銹が著しく、鞘木が銹着しているものと観察される。

この刀子で注目されたことは、刃部中央部に「櫛」の銹化痕が認められたことである。この 銹化痕の認められた側は、出土時には下面となっていた。この櫛の銹化痕は、半円形状の柄部 の圧痕の一部であり、高さ1.5 cm、下端幅2 cmと推定される。柄部中央には縦に結縛の痕跡が あり、細い竹歯を縛っていたことが知られる。櫛としては、小形の竪櫛である。

2) 鉄鏃(図版10A-2;23-3)

鉄鏃は、現存長10.6cmであり、細根式刀子形の鉄鏃である。刃部は長さ2.8cm 幅0.7cm,背幅2.5 mmである。篦被部分の先端は折損している。この鉄鏃では、現存部の篦被部分にわずかに篦の遺残が認められ、さらにその外側を幅3 mmの鉄製環がめぐっている。おそらく篦の口をおさえるための金具であろうと思われる。

f その他の遺物

その他の遺物としては、中世陶器、縄文土器などがあげられる。

①中世陶器

(イ) 片口土器 (図版10B-4;23-4)

古墳東南部の墳丘斜面の表土下で出土した。墳丘に浅い凹みがあり、そこにいく分埋れるようにして、底部を上、口縁部を下に向けて、つまり、完全に反対になって検出された。いわゆる摺鉢形の陶器で、口縁の一側に小さい片口がつけられている。色調は橙褐色で焼成は良好である。成形は巻上げによる。外面の調整は横ナデで、内面は、上半が横ナデ、下半がタテのヘラケズリによっている。底部には、焼成後あけられた径3cmほどの不規則な円孔が穿たれているが、人為的なものか自然破損したものかは不明である。検出時、土器の下からは何も発見されなかった。鎌倉時代頃のものと見られている。(宮城県教育庁文化財保護課技師藤沼邦彦氏の御教示に基づく。)

(ロ) 椀形土器 (図版 9-12)

前方部から出土した。底部が欠失していて全形の復原は不可能だが,底部から斜め上方に,ほとんど直線的に立ちあがって口縁部に達する器形である。器高は,体部下半が4mm,口縁部が9mmで,下から上にいくにつれ,次第に肥厚する。成形および調整はロクロ水挽きによる。色調は淡黄褐色で焼成よく,いわゆる須恵系土師器と呼ばれるものに類似する。片口土器同様,鎌倉時代頃のものと考えられる。

②縄文土器:細片が数点出土したのみである。出土部位は、墳丘下の旧表土層と見られる黒色土中および墳丘封土からも若干出土した。縄文のみの破片と沈線のはいった破片とあり、い

ずれも縄文晩期頃のものと見られる。

Ⅵ考察

(1) 古墳の築造年代について

裏町古墳は、今回の第2次調査によってほぼその全容を明らかにしたといえる。

すなわち、墳形からみると前方部がやや低平な前方後円墳であると見ることができる。 ただ、 十分な調査はできなかったけれども、前方部の形態はやや先端で広がりを示すものがありそう である。また、前方部の置かれた位置が台地の高まりとなっているために、後円部との比高 差は約3 m に過ぎないが、そのような地形的制約を除いて考えても前方部がやや高まりを示す 傾向を示していることはうなづけそうである。

この古墳の内部主体は、河原石積の竪穴式石室であった。この石室の築造過程においては、墳丘盛土を切り下げて墓址を掘り込み、その墓址内に3.6×0.8mの石室を作り、墓址壁との間は河原石を充塡したものであった。この種の河原石積石室は、近傍では市内長町鹿野前一塚古墳でも知られており、この例では家形石棺がおさめられていた。もちろん、この一塚古墳とは家形石棺を伴なう点で年代的な隔たりを示すが、河原石を用いて石室を構築する方法が、既に裏町古墳の段階で行なわれていたことは明らかとなったといえる。このような竪穴式石室の採用は、この裏町古墳の相対年代が横穴式石室などの採用以前に位置づけられるものであることを示しており、年代考定上で一つの限定を与えている。

この古墳の石室内からは、珠文鏡・鉄刀子・鉄鏃の3点の遺物しか発見されなかった。しかし、この石室の西南部から中央にかけては大きく盗堀されて破壊されているので、元来は刀剣や玉類も副葬されていたものが失なわれてしまっている可能性がある。ともあれ、見出された遺物をみると、小形珠文鏡などがあり、年代を考える手懸りは認められる。この種の珠文鏡は、多く小形の珠文を配するものが多いが、裏町古墳の例ではやや大き目の珠文を内区に配し、またその外周に太い凸帯をめぐらすという点で特徴的な文様をあらわしている。このような小形鏡の多く用いられた年代は、5世紀頃を中心とする頃とみられる点で、この珠文鏡もまたその範囲の中で考えられるものがあろう。それと共に、石室内からは刀子形を示す細根の鉄鏃が1点発見されている。その鉄鏃の形からすれば、年代は5世紀の後半よりさかのぼることはないであろうと思われる。また、刀子の一側面には櫛の銹化痕が見られ、小形の竪櫛も副葬されていたことが推定された。これらの櫛の副葬されているものは、比較的古い段階の古墳に見られるものである。

これら石室内出土遺物以外に, この古墳では墓址周縁から土師器・須恵器が発見されている。 特に, 墓址内の攪乱土中から見出され, 年代も遅れる糸切底土師坏などを除いて考えれば, 墓 坂南縁に置かれた土師器壺はこの古墳の送葬儀礼と関連することは容易に推測される。しかし、この壺は発見時に既に大きく破損されていた為、その全体の特徴を知ることができない。 ただ、胴部のカーブよりみてやや下ぶくれ気味の球形壺であったろうとみられる。また、墓址 西縁附近を中心として出土している須恵器破片を復原して考えれば、器台・台付壺・横瓶など があり、この地域では余り知られていなかった須恵器が知られた。これらの器形の特徴をみる と、脚部の形状・方形透しなどよりみてさしてくだる須恵器とは見られず、この地域発見のも のとしては古い須恵器である。おそらく5世紀後半から6世紀頃のものと思われる。

これらの出土遺物以外に、この古墳では埴輪が認められたし、墳丘裾部には葺石列がめぐっていた。埴輪には円筒と朝顔形の2種がある。それらの配列は十分に把えることができなかったが、出土位置の知られるものや原位置の推測されるものから考えて、ある間隔をもって墳丘頂部から裾まで数列にわたって立てられていたものと思われる。この埴輪の使用は、この地域の古墳としては古い様相を示すと思われるが、組み合せも円筒と朝顔形のみであるので十分に年代を想定するにはいたらない。ただ、人物などの新しい年代に属する埴輪を含んでいないし、葺石などをめぐらしている点で相対的には年代を下らせることはできないであろう。

以上に述べた古墳及びその出土遺物の特徴から考えて,裏町古墳の築造年代はかなり限定して見てゆくことができそうである。すなわち,墳形からみると前方部の広がり,高まりの傾向を示し,埴輪・葺石を有している点で比較的古い古墳であろうとみることができる。しかも,内部主体として河原石積竪穴式石室を有することは,横穴式石室採用以前の年代を示すものといえる。出土遺物をみると,5世紀代を中心とするとみられる珠文鏡が見られるが,鉄鏃の形態は細根刀子形を示しているので5世紀でも新しい時点以降となる。それはさらに須恵器の特徴からも考えられ,古く考えても5世紀後半以降のものであろう。この古墳の下限をどこまでとするかは問題であるが,この地域で現在までに知られている古墳の様相から考えて,6世紀に下るとしても大きく下るものではないと思われる。これらを考慮して考定すれば,裏町古墳の年代は500年前後の頃と考えるのが最も妥当であろうと考われる。

(2) 古墳の被葬者について

裏町古墳の内部主体は後円部中央に築かれていた河原石積竪穴式石室であった。この石室に 葬られた被葬者は、出土遺物から考えても一人である。

この被葬者は、前方部を西とした前方後円墳に頭位を東として葬られていた。このような方位のとり方は、古墳の位置する個所より西方の斜面及び南方の低地にかけての部分に古墳営造者の集団が住んでいたことを示していよう。特に、この古墳が前方後円墳であることを形の上で最も効果的に見ることができるのは南側の斜面から低地にかけての地帯であると観察される

から、その附近に被葬者を含む人々の集落が存在したであろう。

この古墳の被葬者は、この仙台市周辺では数少ない前方後円墳に葬られていた。しかも古墳の規模からみて仙台市内では第3位の古墳である。

遠見塚古墳

主軸110m

前方後円墳

兜塚古墳

直径 50m

円墳

裏町古墳

主軸 40m

前方後円墳

このような古墳に埋葬された被葬者は、この地域でも有力な豪族であったと思われる。特に その点では、東北地方としても現在発見例の少ない鏡を有していたことなどから良く推測でき るところである。いまそれらをあげれば、次のようである。

福島県会津若松市会津大塚山古墳⑫

三角縁二神二獣鏡

四獣鏡

捩文鏡

北会津郡北会津村田村山古墳⑬

内行花文鏡(2)

安達郡本宮町愛宕山古墳⑭

五鈴鏡

伊達郡保原町土橋古墳⑭

珠文鏡

相馬市西山表西山横穴(9)

珠文鏡

いわき市高阪古墳 2 号墳 15

给 鏡

伊達郡国見町塚之目古墳⑬

素文鏡

宮城県伊具郡丸森町台町古墳⑮

六鉛鏡(2)

内行花文鏡

仙台市鹿野一丁目一塚古墳 ⑰

鳥文鏡

仙台市富沢 裏町古墳

珠文鏡

古川市小寺開18

変形獣文鏡

このような副葬品を有する被葬者であることは、おそらく在地における有力豪族であるだけではなく、中央政権ともかかわりを有した者であったと思われる。鏡のように、東北地方などで鋳造の考えられない遺物を所有していたことは、畿内中央との関連なしには考えられない性格を示している。もちろん、この古墳の位置した富沢周辺も早くから農耕適地として開けたところであり、その生産力を背景として生れてきたものであることはいうをまたない。

この古墳の被葬者は、仙台平野の中でも名取川の北岸地域で代表的な豪族であったと思われる。その活躍は、広瀬川の東側の遠見塚古墳や、名取川を挟んで南方の植松丘陵地帯にある雷神山古墳などの古墳に続いて5世紀末葉頃にかけて見られたものと思われる。この頃からこの富沢周辺では古墳営造が進められ、6・7世紀代の古墳が後続点在するようになったものと考えられる。

(3) 出土品について

(a) 埴 輪

- ① 出土品の8割以上が埴輪であったが、完形品および原位置を保っているものはきわめて少なく、それぞれ数点を数える程度であり、埴輪の配列などを復原することは困難である。
- ② 出土埴輪では、筒形円筒埴輪、朝顔形埴輪などが見られたが、形象埴輪と思われるものは、今回の調査では全く認められなかった。
- ③ 形態的には、埴輪は、大きく上記二種のようになるが、細部の形態で、さらに何種類かに分けることが可能である。すなわち、口縁の形態、大きさ、底部の形態、凸帯の形態、透かしの形態などの面に2・3の変種が認められるようである。また、前方部から出土した方筒形の埴輪は、他にあまり類例を見ないものである。
- ④ 焼成、成形、調整など、埴輪の製作技法の面からもまた、数種類の変種を認めうる。焼成には、陶質の埴輪を含め3種類、調整の面では、刷毛目の種類などに技法的な変種が認めうる。これらは、③における形態上の変種の存在と考え合せ、製作集団の多様性を示すものかもしれない。しかし、全般を通してみると、本古墳出土の埴輪は、非常に企画的であり、入念さがこもっていると見てよく、歪んだような形態の埴輪はほとんど見られなかった。
- ⑤ 総体的に遺構との関係はつかみにくかったが、その中でも、断片的ながら注目すべき点もいくつか認められる。第一は、後円部墳頂縁辺に埴輪列が想定できること、第二には、前方部と後円部の接点付近、中軸線周辺で、小型埴輪が堀り方を伴っていくつか発見されていること、(このことは、後円部と前方部を区画していることを意味するものと思われる。)第三には、前方部縁辺にも、埴輪列とおぼしきものの存在が想定できるが、その中に方筒埴輪など特異な固体が含まれていることなどである。
- ⑥ 本古墳では、相当量の埴輪が出土したわけであるが、これらの埴輪の供給地はどこに求められるのであろうか。今の所、仙台市内のみならず、県内でも埴輪窯跡として確認された窯跡は発見されていない。そこで、周辺の埴輪出土地を求めてみると、
 - ④富沢窯跡:仙台市富沢・裏町古墳から0.5キロ
 - 回原遺跡®:仙台市富沢・裏町古墳から0.5キロ
 - ○宿在家遺跡⑩:仙台市富沢・裏町古墳から1.4キロ
 - ⑤ Ⅲ屋敷遺跡◎:仙台市大野田・裏町古墳から1.9キロ
 - (お岩切中校庭遺跡:仙台市岩切・裏町古墳から11.3キロ(伝聞)
 - ○新田遺跡:多賀城市新田・裏町古墳から11.9キロ(伝聞)
 - このうち、⊘、⊝、雨、⊙はいずれも平地で、これらは、かって、この近辺に埴輪を有する

古墳があって、それが開墾の為くずされて埴輪だけがちらばっているものかもしれない。回は、裏町古墳と同じく丘陵裾の緩斜面上にあり、また⑧文献の略図中に、位置的に符合する古墳があったことが知られており、やはり古墳跡かと考えられる。①は、丘陵南斜面の高所の切通し部分に、数基の窯の断面が露出していて、付近からは互や鉄滓など種々の遺物が散見できる中に埴輪破片が混じっている。地形的に見ても、距離的にも埴輪窯が埋蔵されている可能性が強い。(第10図)

つまり、裏町古墳をはじめ、西多賀地方の 古墳の埴輪は、三神峯丘陵を中心とする丘陵 部で製作され、各古墳に供給されたものと考 えられる。(付記:昭和49年4月5日、古窯跡 研究会(代表渡辺泰伸)により富沢窯跡が調 査され、埴輪窯が確認されたと現地で成果発 表が行なわれた。)



第10図 富沢窯跡

〈b〉 須恵器および土師器

- ① 須恵器,土師器は,後円部主体部盗掘拡周辺から集中的に出土した。総量は,平箱3箱分程度である。原位置を保って検出されたものはほとんどない。このため,出土状況を厳密に検討するまでには至らず,古墳築造当初の副葬品と断定するには若干の疑問がないでもない。ただし,土師器の内黒坏は,明らかに平安期のものであって,これは,後世まぎれこんだものか,あるいは,平安期にも信仰の対象として考えられて供献されたものかもしれない。
- ② 出土品の器形を検討してみると、須恵器は、横瓶、台付壺、壺、腺などが目立ち、土師器では、古手のものでは壺、高坏があって、儀器的性格が強いと思われる器形が目立った。 坏や 変など日常的用途を主とする器形はほとんど見られなかった。
- ③ 製作技法的な面では、須恵器は、色調、焼成の面で大きく2つに分けることが可能である。一つは、暗灰青色で焼成の良好なもの、もう一つは、灰白色で焼成不良で生焼けのような感じのもので、個体数としては、後者の方が多い。成形はほとんどが巻上げによっているが、小型壺や碌の一部など薄手のものについては不明である。調整は、上記一部のものを除いては、全般的にやや粗雑である。特に、内面の調整は雑で、横瓶などは、指ナデ調整の際の指紋の痕跡が随所に見られるし、また、ヘラ調整なども雑で器壁の凹凸が目立つ。外面の調整では、とくに後者のものの中で埴輪に施されていると同様の刷毛目が全面に施されていることが目立った。文様としては、櫛目による波形文が施されていたが、これらは、ごく薄い文様であった。

④ これらの須恵器が現地で製作されたものかあるいは関東以西からの移入品なのか実態は全く不明であるが、とくに焼成よく、調整も入念なものに関しては移入された可能性も考えられる。

(C) 中世陶器

古墳の裾で発見された片口土器は類似するものが仙台市岩切鴻ノ巣遺跡で発見されており、 器形、器質から見ると鎌倉時代頃のものと考えられる。しかも、その出土状況などから見ると 蔵骨器の蓋ではないかと考えられる。(以上、藤沼邦彦氏の御教示にもとづく。)また椀形土器 も同時代のものと見てよいだろう。してみると、墳頂部における内黒土師器坏の出土と考え合 せて、古墳時代以後中世に至るまで、本古墳が周辺地域の信仰の対象と考えられていたことを 示すものかもしれない。

Ⅲ 仙台市内の古墳中における裏町古墳の位置

以上に見て来たように裏町古墳は,三神峯丘陵の麓の傾向に長さ約40m,後円部径25~26m,前方部14~15m,高さ後円部4.5m,前方部0.8mの西面する前方後円墳であり,墳丘上には,帯状をなして墳丘をめぐる葺石と埴輪円筒列を有する。内部構造としては後円部頂上近くに長さ3.6m,幅0.8mの古墳主軸に平行する河原石積の竪穴石室を有する。石室内には木棺におさめた遺骸が埋葬せられたと推定された。早く盗掘に逢い副葬品はすでに失われていたが珠文鏡,鉄鏃,刀子,櫛などが幸いに残存していた。これらの特徴から,紀元500年前後の造営と判定された。ところでこのような裏町古墳は,仙台市内の古墳の中でどのような位置を占めるのあろうか,仙台市内には約34ヶ所に古墳とおぼしきものの存在がみとめられる。②

そのうち形も小さく,また埴輪や葺石もなく,内部施設も不明なため古墳であることの確認し難いものや高塚を形成しない横穴を除くといわゆる高塚古墳として確実なものは7基になる。その中で岩切燕沢にあった糠塚古墳[®]以外は,市の西南部に集中的にあることは注意すべきである。すなわち国の指定史跡である遠見塚古墳を最東端とし,法領塚古墳,兜塚古墳,一塚古墳,二塚古墳,裏町古墳と約5kmの間に6基の古墳が存在するのである。

遠見塚古墳(第11図)遠見塚一丁目にある。仙台平野の真中に南面してつくられた全長 110m の前方後円墳で,墳丘は少し崩れているが,もとの幅は後円部62m ,前方部38m ぐらいと推定される。高さは後円部6.7m ,前方部2.5m である。前方部高が後円部にくらべて著しく低く,かつ幅が狭くていわゆる柄鏡式前方後円墳であるのがこの古墳の形態的特徴である。段は二段ある。埴輪,葺石は発見されない。いまは仙台バイパスで前方部の一部を削られているが,宮城県名取市の雷神山古墳,福島県会津坂下町の亀ケ森古墳につぐ東北で第3位の大古墳で,昭和43年に国の史跡に指定された。昭和22年進駐軍が霞目飛行場整備のためこの古墳の後円部を崩して土採りした際,墳丘下2mのところに2.25mの間隔を置いて粘土槨が2本あらわれたが,西槨

上から土師器の壺が1個採集されただけで他に遺物はなかった。この土師器は南小泉式の土師器であるところから5世紀前半の造営と判定される。仙台市内で最古,最大の古墳である。^②

法領塚古墳(第12図)遠見塚古墳の北西西1.1km,一本杉の聖ウスルラ学園の校庭にある。径32m,高さ6mの円墳で,その南方に偏して長さ5.7m,幅1.9mの玄室があり、玄門の前に幅1.24m,長さ



第11図 遠見塚古墳

4 m の前庭が続く。市内の古墳で横穴式石室を見ることができるのは,ここだけである。7世紀初頭のものと思われる。^⑤

兜塚古墳(第13図)根岸町の宮城県立農業高等学校のグランドのわきにある。径50m,高さ5.5m,三段築成で,市内にある円墳としては最大のものである。葺石および埴輪円筒の破片が見られる。まだ発掘されていないので,内部構造は不明であるが,その大きさ,埴輪の存在から見て5世紀後半の造営であろう。²⁶

一塚古墳(第14図)長町鹿野前31番地,す なわち現在の鹿野一丁目にあった円墳である が, 現在は破壊され, その跡には家が建って むかしのおもかげをしのぶべくもない。円墳 の大きさは径24~35m ぐらいのものといわれ ている。明治39年4月6日, この墳丘の中央 部より南東よりの処で板石5枚をもって蓋を した幅約1m, 長さ4.2m,高さ約1mの平石 積石室が発掘され, その中から家形石棺が発 見された。この石棺はいま出土遺物と共に東 京国立博物館にあるが、砂岩を刳り抜いてつ くられたもので、蓋と身とからなり、蓋は蒲 鉾形で高さ45cm, 長さ238cm,幅85~90cm, 両 側の斜面に径36cm, 円形の縄掛突起が2個ず つ,合計4個ある。内側は深さ23cmの半円形 に刳られている。身は上縁で測って長さ233cm 幅80~86cm, 高さ58cmで, 合せ口は印籠造り になっている。身にも縄掛突起が2個ずつ, 4個ある。

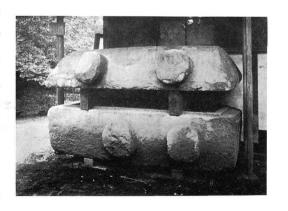
石棺内からは六乳鳥文鏡一面,硬玉製勾玉 2個,碧玉製勾玉3個,ガラス小玉458個,滑 石製臼玉6個および金環1個が発見された。



第12図 法領塚古墳横穴式石室



第13図 兜塚古墳



第14図 一塚古墳出土家形石棺

鏡は径16.1cmの後漢時代後半のもので,東北出土の中国鏡として唯一のものである。家形石棺は普通横穴式石室より出土し古墳時代後期に盛行したものと言われているが,この石棺は竪穴式石室の中にありしかも棟幅がせまく,かつ縄掛突起が丸い点で家形石棺では古い型式と見られ,6世紀初頭の造営と見られる。この古墳には埴輪はなかったようである。②

二塚古墳(第15図) 一塚古墳の西500m の長町鹿野前9番地にあった。一塚古墳とは指呼の間であったろう。昭和24年に削平されてしまい,現在ではその跡を探すことさえ困難である。大きさについては諸説あるが,長さ約30m,径前方部,後円部ともに15m,高さ後円部4m,前方部2.5m ぐらいのものであったとするのが妥当であろう。西向きの前方後円墳であったことは諸書の記述の一致するところである。明治38~39年頃発掘され,後円部から凝灰岩の刳抜石棺の身が出土した。長さ約2.6m,幅約1m,高さについては記したものがないが,写真で見ると70cmぐらいのものであろう。穴の深さは30cmぐらいと伝えられている。上縁が印籠造りにつくられているから元来は蓋があったと思われるが,合蓋は発見されず,板石が出たというが,その板石も発掘者の言によれば石棺の上から出たものではなく,別の場所から出た由である。『仙台市史』では底が丸味をもっているので舟形石棺としたが,高さから見ると家形石棺とするのが適当であろう。

墳丘上には礫石が散在しており、埴輪円筒の破片がひろえた。「石槨、陪塚、濠、階段を有せず[®]」との報告があるから散在する礫石は葺石かも知れぬが、葺石にしては浮いているものが多かった。すべて失なわれたいまとなっては、確かめるすべがない。[®]

このような古墳は古代豪族の墓であり,古

第15図 二塚古墳出土刳抜石棺

代にこの地方を支配していた首長の墓であることはいうまでもない。そして古墳は大和地方で発達したものと見られるから、その仙台地方における存在は、大和文化の仙台平野への伝播を物語ると共に、当時の仙台地方が古墳によってその権力を表示し得るほどの権力者を必要とする社会になっていたことを示すものである。

仙台附近で古い古墳の多いのは名取市であって、ことは東北第一の古墳地帯である。東北最大の古墳である雷神山古墳、4世紀後半まで溯ると思われる字ケ崎一号墳[®]埴輪家や埴輪甲を出し、かつ直弧文ある鹿角刀装具を副葬した長持形場組石棺を出した経塚古墳[®]前方後方墳である薬師堂古墳、観音堂古墳[®]など東北でも注目すべき古墳がこの地に密集している。仙台市の西南部に存在する古墳は名取の古墳と一連のものとして理解すべきであろう。

仙台市内に古墳がつくられるようになったのは遠見塚古墳が示しているように、名取地方よ

り若干おくれて5世紀前半と見られるが、遠見塚古墳が東北第3位の大古墳であることは、東北有数の首長が仙台附近に居住していたことを示している。仙台平野は律令政府の東北開拓によって、つまり多賀城設置以後、はじめて拓けたものではなく、それ以前から拓けていたのである。裏町古墳は兜塚古墳、一塚古墳、二塚古墳などとともに、その後も依然として仙台附近が東北の政治、文化の一つの中心をなしていたことを物語るものである。7世紀になると古墳が少なくなるのは、この頃から横穴が流行して来たためであって土手内、宗禅寺、向山、燕沢、岩切台、入生沢など市内各地に多くのこっている横穴群³³がこれを証している。

裏町古墳はこの中にあって兜塚古墳とほぼ同じか、あるいはこれに次ぎ、二塚古墳に先行するものと思われる。

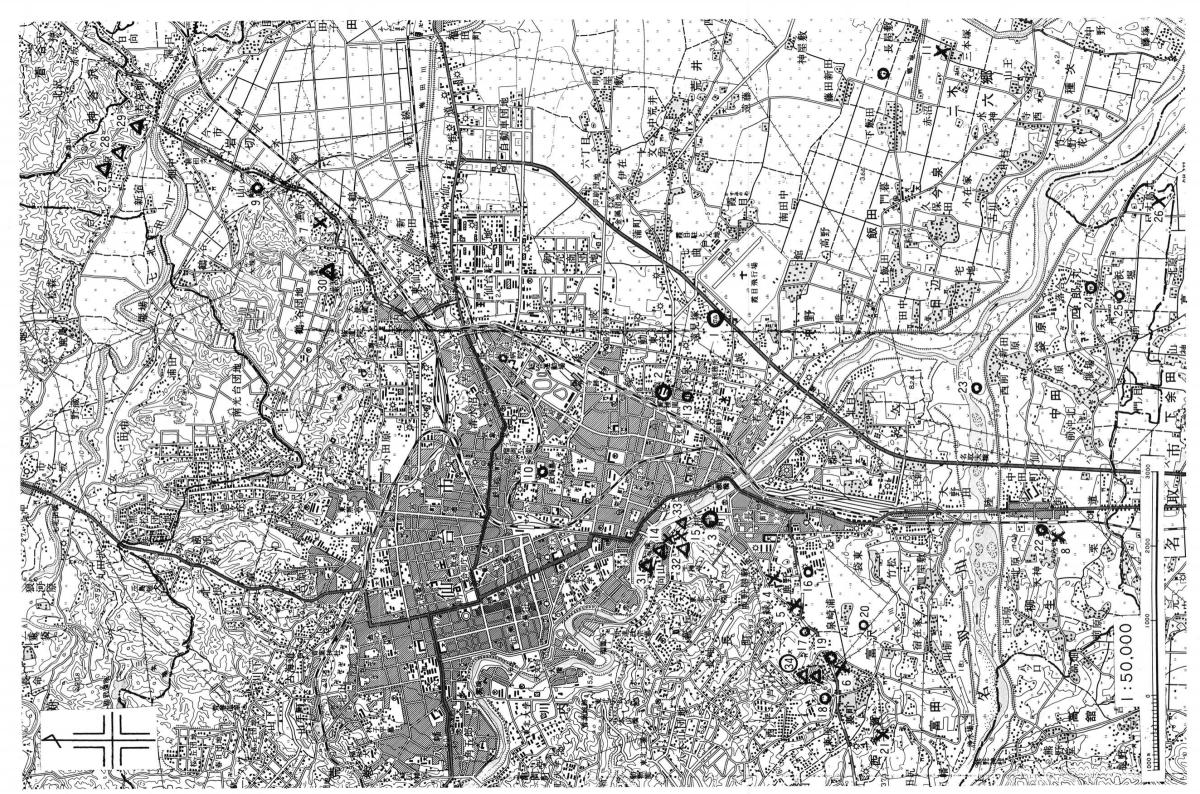
〈註〉

- ① 伊東信雄「仙台市内の古代遺跡」(『仙台市史』第3巻、昭25) P69
- ② 宮城教育大学考古学研究会『宮教考古』第5号(昭48)P3~22
- ③ 宮城教育大学日本史研究会『歴友』第3号(昭43)
- ④ 仙台市教育委員会「三神峯遺跡北東部調査概報」(昭48)
- (5) 昭和48年1月,採集者仙台市富沢字金山13. 今野由太郎氏より,仙台市教育委員会に寄贈
- ⑥ 註②文献P14, 15
- (7) 宮城県教育委員会「安久東遺跡発掘調査現地説明会資料」(昭47)
- ⑧ 浜田廉「名取鎮所址」(『宮城県史蹟名勝天然紀念物調査報告』第5輯,昭4)
- ⑨ 仙台市教育委員会「仙台市富沢裏町古墳試掘調査概報」(昭48)
- ⑩ 宮城県教育委員会「八谷館跡」現地説明会資料(昭48)
- ① 仙台市茂ヶ崎の大年寺山一帯に、14世紀中頃から、1世紀以上にわたり当時、名取地方の領主であった粟野氏が居城していた。空濠、土塁の一部が今なお現存する典型的な中世の山城である。「仙台領古城書上」参照
- ② 伊東信雄,伊藤玄三「会津大塚山古墳」(『会津若松市史』別巻1,昭39)
- ③ 穴沢口代「内行花文鏡を出土した会津の一古墳」(『古代学研究』25,昭35)
- ⑪ 福島県史6
- ① 福島県史1 P183
- ⑥ 志間泰治「宮城県伊具郡金山台町古墳群調査概報」(『歴史』7,昭29)
- ① 註①文献P61~66
- ⑧ 「日光山古墳群」(『古川市文化財調査報告』第2集,昭48)
- (19) 註(2) 文献P10
- ② 註②文献P14

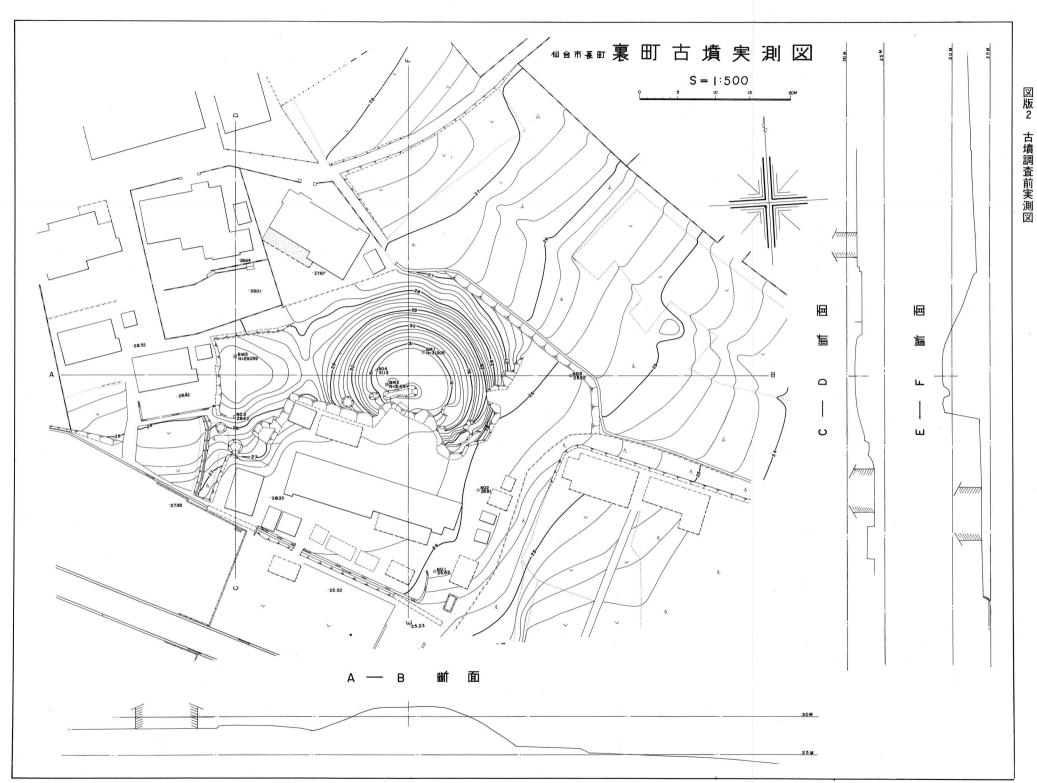
- ②1) 註②文献P15
- ② P 40表 1 参照
- ② 伊東信雄,伊藤玄三「糠塚古墳調査概報」(『宮城県文化財調査報告書』第8集)
- ② 伊東信雄「遠見塚古墳」(『宮城県文化財調査報告書』第1集,昭29)
- ② 氏家和典『仙台市南小泉法領塚古墳調査報告書』(仙台市教育委員会,昭47)
- ②6 註①文献P59~61
- ② 註①文献P61~66
- ⑱ 高野松次郎「仙台市茂ケ崎付近にて発見せる古墳」(『考古界』6-2)
- ② 註①文献P55~59
- ⑩ 宮城県教育委員会「名取市宇ケ崎遺跡」現地説明会資料,(昭47)
- ③ 伊藤玄三「古墳文化各説-東北-」(『新版考古学講座』5, 昭45) P168
- ② 氏家和典,加藤孝「古墳文化の地域的特色-東北-」(『日本の考古学』W, 昭41) P500
- ③ 註①文献P71~74

表-仙台市内の古墳・横穴一覧

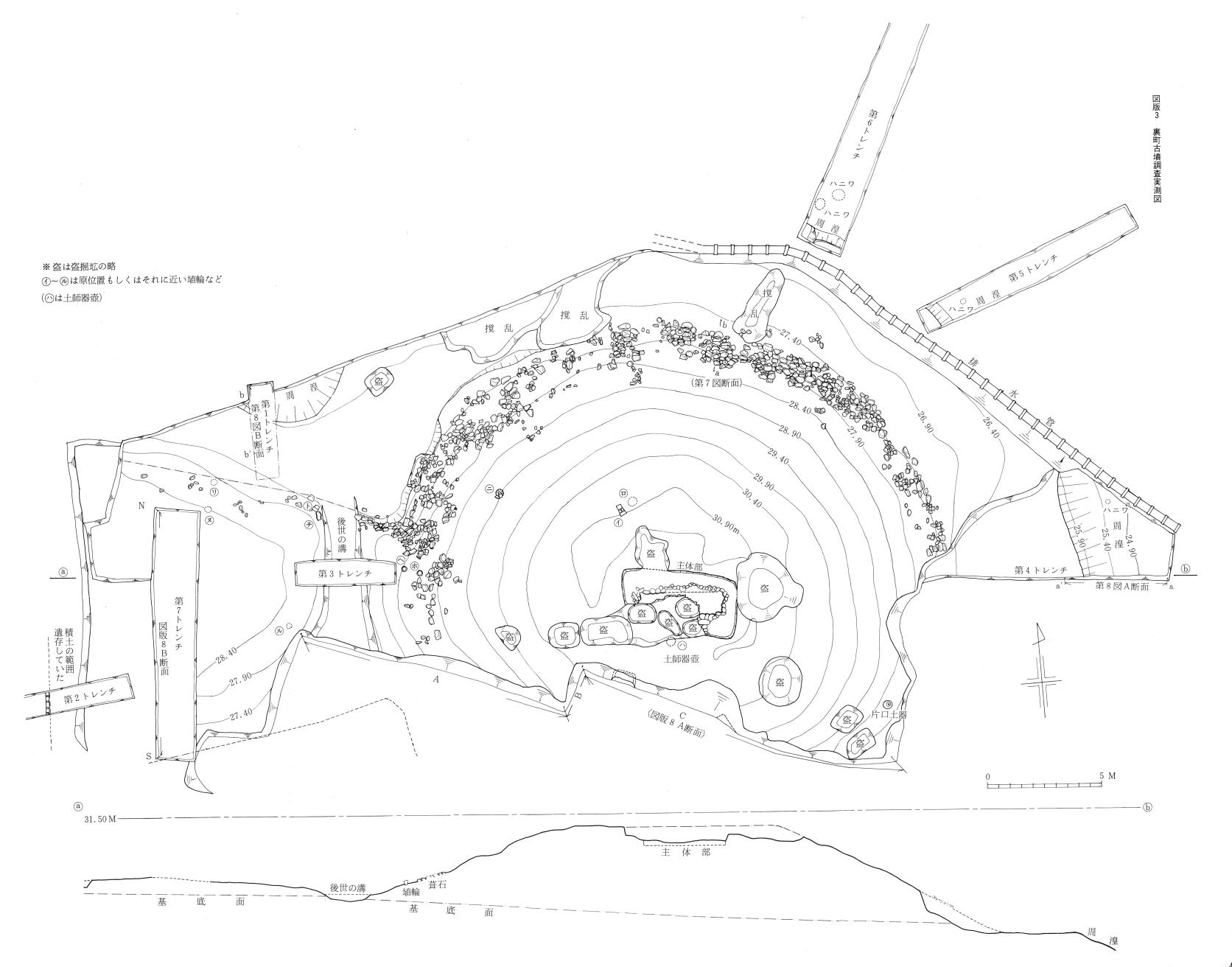
No.	名 称	種 別	古 墳 の 概 要	出土品	発掘調査の有無	保 存 状 況	備 考
1	遠見塚古墳	前方後 円墳	主軸110m,高さ7m 粘土槨2	土師器壺	昭和22年伊東一部調 査,(報告書あり)	後円部の一部 , 前方 部の一部損壊	昭和43年国指定
2	法領塚古墳	円墳	径32m ,高 6 m 横穴式石室	鉄製馬具	昭和47,仙台市教委 調査(担当氏家― 報告あり)	墳丘はほぼ完存。	
3	兜塚古墳	円墳(?)	径50m , 高 6 m 埴輪,葺石を有す		無	東側裾部,道路で一 部削除	
4	一塚古墳	円墳	径24~35m, 高3~4m 平石積石室, 家形石棺	鳥文鏡,勾玉,ガラ ス,小玉,臼玉,金 環	明39, 発掘(報告書 なし)	壊滅 (宅地)	出土品,東京国 立博物館蔵
5	二塚古墳	前方後 円墳	主軸30m,高4m 家形石棺,埴輪		無	壊滅(昭24, 宅地)	
6	裏町古墳	前方後 円墳	主軸40m 余,高4.5m 河原石積竪穴石室,埴輪 葺石,周湟	珠文鏡,刀子,鉄鏃 須惠器,土師器,片 口土器	昭48, 仙台市教委調 査(担当伊東-報告 書あり)	壊滅(昭48, 宅地)	
7	糠塚古墳	円墳	径30m,高5m 長楕円形掘りこみ?		昭37, 宮城県教委調査(担当伊東―― 概報あり)	壞滅(昭37, 宅地)	
8	安久東古墳	不明	墳形規模不明 河原石積横穴式石室	直刀,馬具,鉄 鏃, 鉄片,銅片	昭47,宮城県教委調 査(担当氏家 —— 説明会資料)	壊滅(東北新幹線 予定地)	
9	千人塚古墳	円墳	径15m,高1.5m		無	一部崩壊	
10	孝勝寺古墳	円墳	径15m,高3m		無	神社の為,変形	
11	三本塚古墳	前方後 円墳?	主軸15m, 高1.5m		無	壊滅 (耕作)	
12	下飯田 薬師堂古墳	円墳	径10m 前後, 高2m		無	現存	
13	猫塚古墳	円墳	径10m 前後, 高1~2 m		無	現存するも,相当に 崩壊	
14	愛宕下古墳	円墳	径10m,高2m	縄文土器,石器	無	壊滅 (宅地)	
15	大窪谷地古墳	円墳	径15m,高3m		無	壊滅 (宅地)	
16	金岡八幡古墳	円墳	径15m,高3m 周徨?		無	神社の為,変形	
17	砂押古墳	円墳	径10m,高2m		無	半壊	
18	三神峯古墳	円墳 2 基	径16m,高2m,径13m 高2m		無	防空濠,盗掘址など で,相当損壊	
19	金洗沢古墳	円墳	径12m,高3m		無	半壊	
20	教塚古墳	円墳?	径15m,高1.5m		無	墳丘は削平 基部残存	
21	上野東古墳	円墳?	径10m 前後, 高2m		無	壊滅(昭47, 宅地)	伝聞
22	エビラ塚古墳	円墳	径10m,高1.5m		無	現存 墳頂に10以上の板 碑	
23	大塚山古墳	円墳	径8m,高3m		無	耕作の為,相当の損 壊	
24	城丸古墳	円墳	径23m ,高 2 m 周湟 ?		無	東側および南側,削 除	
25	弁天囲古墳	円墳	径7m,高1.8m		無	現存	
26	庚申塚古墳	円墳?	径19m 余?高2.1m		無	壊滅 (開田)	
27	入生沢横穴群	横穴古墳	数十基?断面蒲鉾形のも の主。家形,アーチ型含 む	長頸壺(須恵器)	無	一部破壞	
28	台屋敷横穴群	横穴古墳	30基以上。断面蒲鉾形が 主。棺台を有するもの, くりぬき棺台を有するも の含む		無	保存良好	
29	東光寺横穴群	横穴古墳	10基以上。断面蒲鉾形が 主		無	防空濠などによる変 造著しい	
30	善応寺横穴群	横穴古墳	100 基前後?断面蒲鉾形, アーチ型,家型など	土師器(坏,鉢) 須恵器(長頸瓶,壺) 刀子,玉など	昭23,伊東実測報告 昭25,加藤他調査報 告,昭42,伊東氏家 調査報告	一部破壞,保存良	昭和43年仙台市 指定
31	愛宕山横穴群	横穴古墳	30基以上?断面蒲鉾形が 主	直刀,須恵器(長頸 壺),人骨	昭48, 市教委調査 (報告あり)	破壊,変造著しい	
32	大年寺山横 穴群	横穴古墳	数十基		無	破壊,変造著しい	
33	宗禅寺下横 穴群	横穴古墳	数基以上		無	破壊,変造著しい	
34	土手内横穴群	横穴古墳	数十基。断面蒲鉾形	人骨4体,直刀, 須恵器(器台,壺)	無	昭24,堤防工事中検 出,一部破壞,現存	



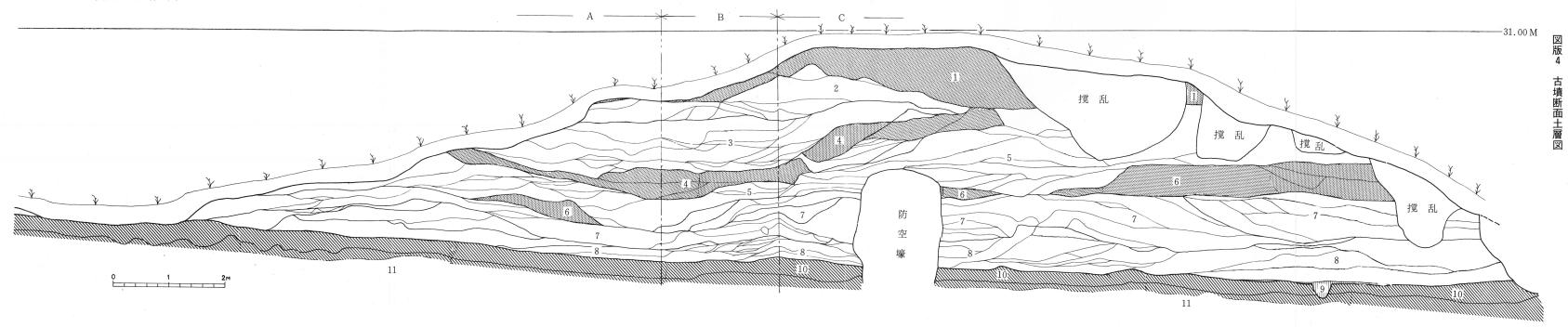
図版 - 仙台市内古墳・横穴分布図 (〇 高塚古墳、× 壊滅したもの、4 横穴)



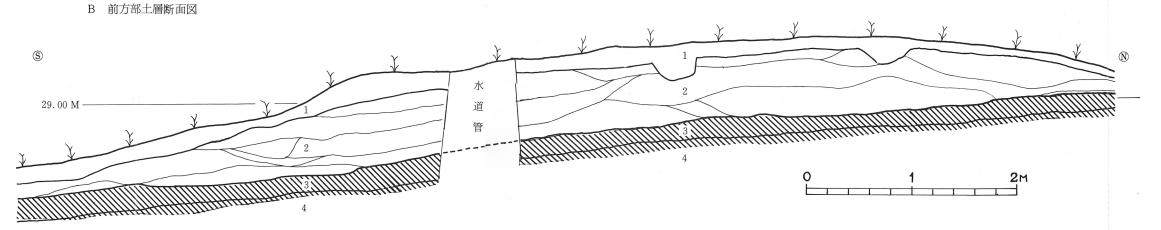
(財団法人 宮城県文化財保護協会提供)



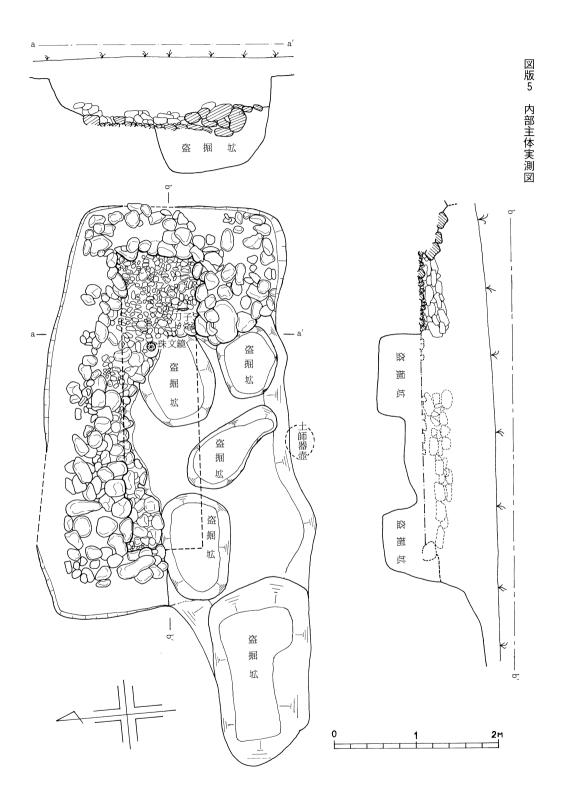
A 後円部土層断面図



- 1. 砂礫層(径7~8cmの円礫を含む)
- 2. 互層(黄色粘土と黒色土)
- 3. 礫をよく含む互層(黄色粘土と黒色土)
- 4. 砂礫層 (礫径 5 cm以下)
- 5. 互層(黄色土と黒色土,礫は全般に少ない)
- 6. 砂礫層 (礫径 2 ~ 3 cm)
- 7. 互層(黄色土と黒色土,礫は少ない)
- 8. 互層(黄色土と黒色土,礫は少ない。互層のの単位が細かく,かなり固くしまっている)
- 9. 黒色土 (炭,焼土粒を含む)
- 10. 黒褐色土 (固くしまっている。縄文土器 を若干含む)=旧表土〈基底層〉
- 11. 黄褐色ローム (粘性強く,小礫を含む)



- 1. 表土
- 2. 互層(黒色土と黄色土。礫の混入は稀少)
- 3. 黒色土層 (固くしまっている)=基底表土
- 4. 黄褐色ローム層(礫を含む)



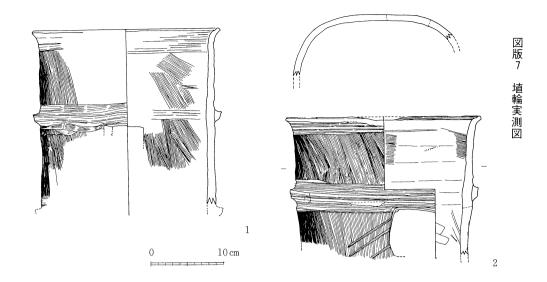
1. 後円部墳頂北西縁辺出土(ハニワ①)

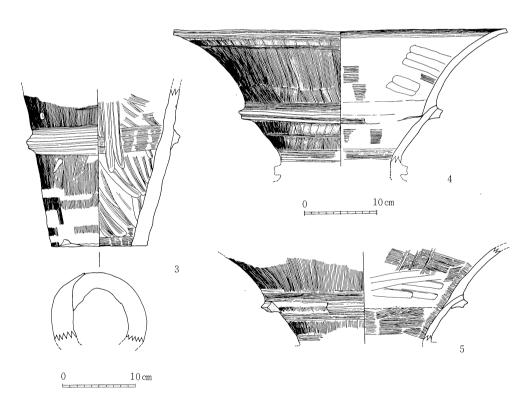
3. 後円部西北斜面出土

2. 第1トレ周湟底出土(摩滅激しい)

4. 後円部東北斜面出土

50





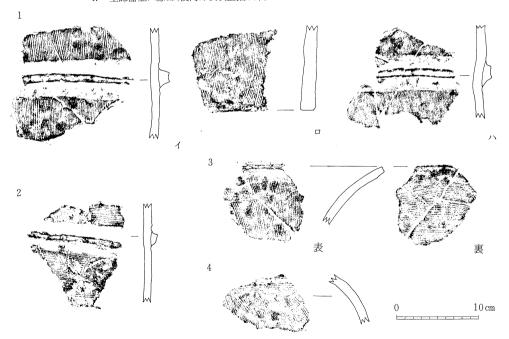
筒形円筒埴輪:前方部北東縁辺出土(ハニワ⑦)
方筒埴輪:前方部北東縁辺出土(ハニワ⑥)
小型埴輪:後円部西側裾部出土(ハニワ⊕)
朝顔形埴輪:後円部墳頂西側縁辺出土
朝顔形埴輪:後円部墳頂東側縁辺出土

2

3

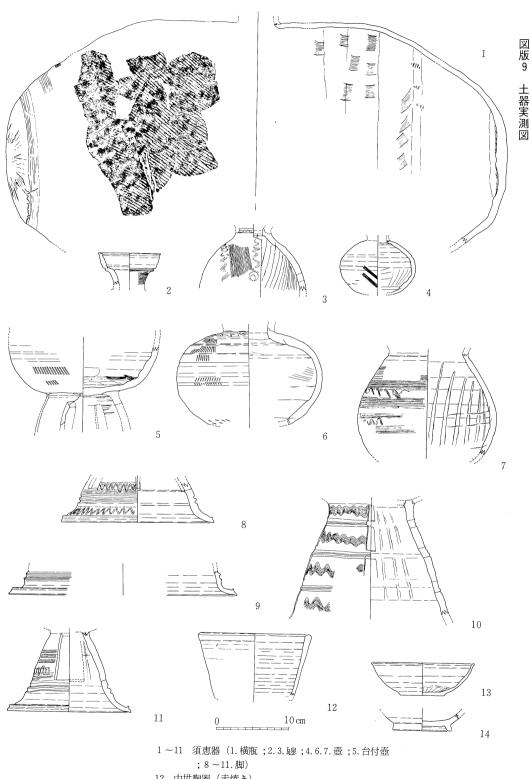
A 各部実測図

- 1. 円筒埴輪底部(底面にタケ様圧痕あり。後円部墳 頂北西縁辺出土。ハニワ②)
- 2. 朝顔形埴輪くびれ部(後円部北西斜面出土)
- 3. 朝顔形埴輪(後円部北西裾部出土)
- 4. 土師器壺口縁部(後円部墳頂盗掘城中)



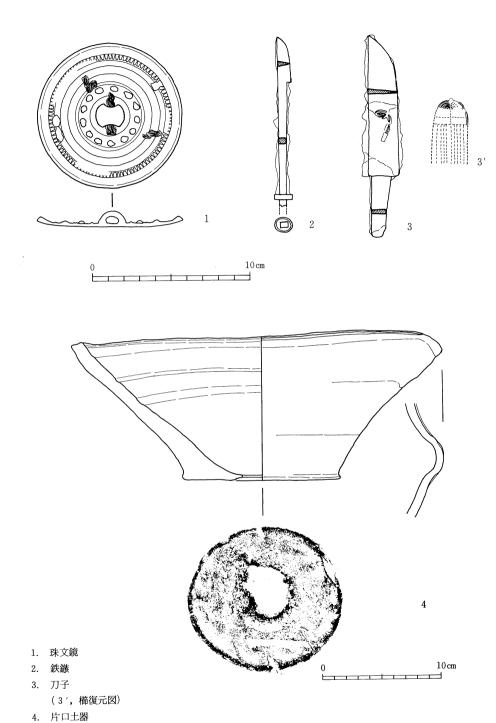
B 刷毛目拓影

- 1. 縦刷毛目(イ. 5~6/cm幅,ロ.7~8/cm幅,ハ.10~12/cm幅)
- 2. 横刷毛目
- 3. 朝顔形埴輪口縁部刷毛目(左側)
- 4. 朝顏形埴輪肩部刷毛目



12. 中世陶器 (赤焼き)

13.14. 土師器 (内黒, 糸切底)



.



図版 | 西多賀地方航空写真(縮尺1:12,500) ○印が裏町古墳 (昭和46年)

図版1 古墳遠景(三神峯より、矢印が裏町古墳)



図版1 古墳現状写真(東北より撮影、右手前方が前方部)

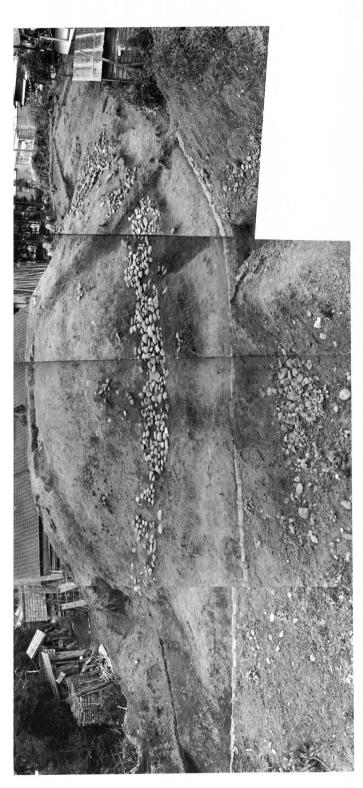


図版14 表土排除の状況



図版15 古墳断面

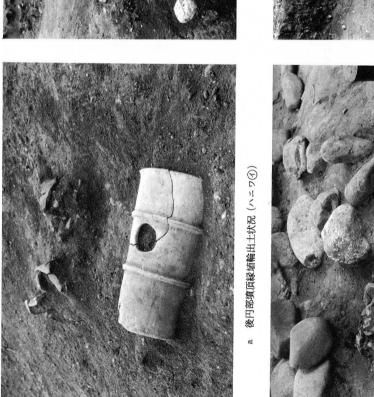




図版16 A 葺石検出状況全景

図 版 17 埴輪出土状況

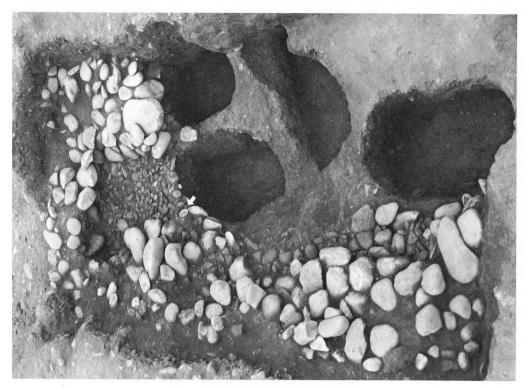
b 前方部縁辺埴輪出土状況 (左・ハニワ ⑤, 右・ハニワ ⑥)





○ 後円部西裾部小型埴輪出土状況(上・ハニワ⊕,下・ハニワ◎)

d 填頂主体部付近土師器壺出土状況(○)



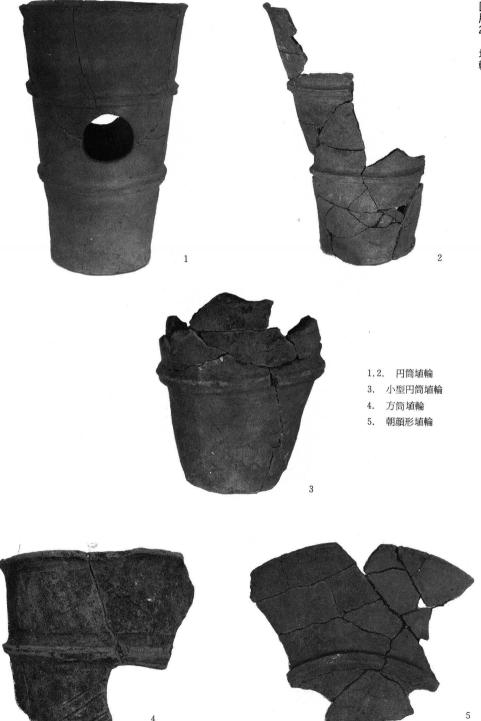


b 前方部から見た内部主体 (西方より)

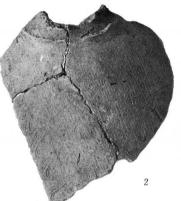


図版2 調査完了航空写真(東北電力菅野氏提供、矢印が古墳)

















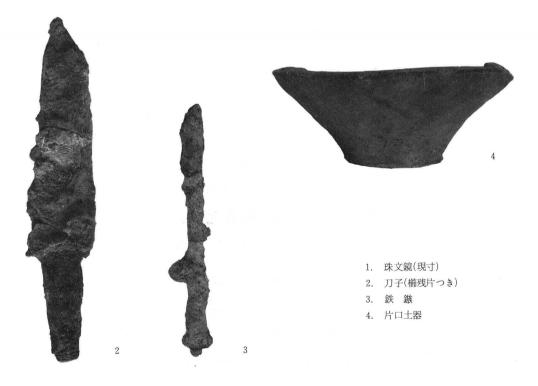




1. 台付壺 2.3. 횮(2.体部, 3.口縁部) 4~6. 脚

図版23 珠文鏡、鉄器、片口土器





仙台市文化財調査報告書刊行目録

- 第1集 天然記念物霊屋下セコイヤ化石林調査報告書(昭和39年4月)
- 第2集 仙台城(昭和42年3月)
- 第3集 仙台市燕沢善応寺横穴古墳群調査報告書(昭和43年3月)
- 第4集 史跡陸奥国分尼寺跡環境整備並びに調査報告書(昭和44年3月)
- 第5集 仙台市南小泉法領塚古墳調査報告書(昭和47年8月)
- 第6集 仙台市荒巻五本松窯跡発掘調査報告書(昭和48年10月)
- 第7集 仙台市富沢裏町古墳発掘調査報告書(昭和49年3月)
- 第8集 仙台市向山愛宕山横穴群発掘調査報告書(昭和49年4月刊行予定)

仙台市文化財調査報告書第7集

裏町古墳発掘調査報告書

昭和49年3月発行

発 行 仙 台 市 教 育 委 員 会

仙台市国分町 3 - 7 - 1 仙台市教育委員会社会教育課

印刷株式会社東北プリント

仙台市立町24-24 TEL (25)6466(代)

